

516

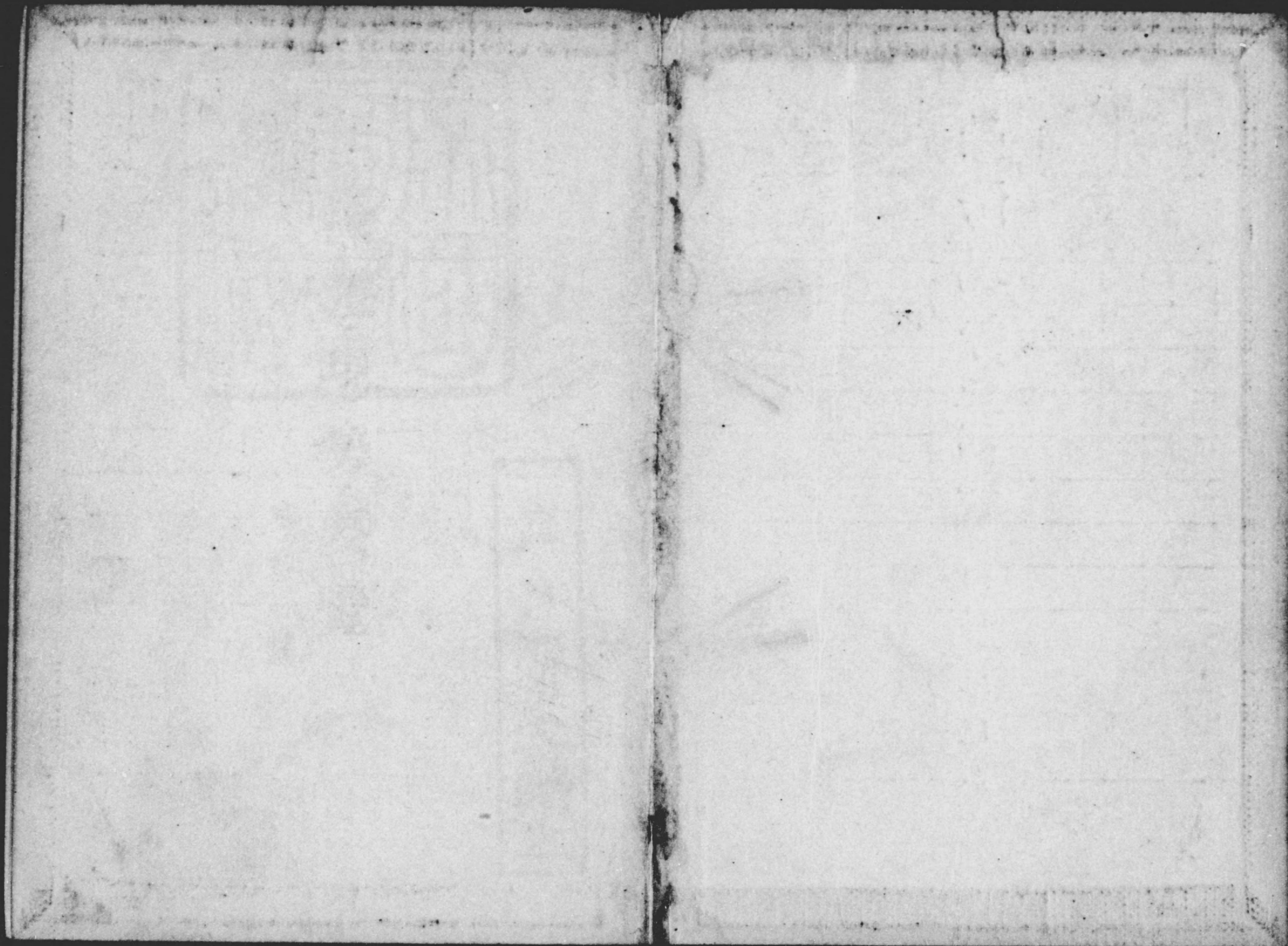
357

516

357

臺灣現勢要覽

昭和三年版





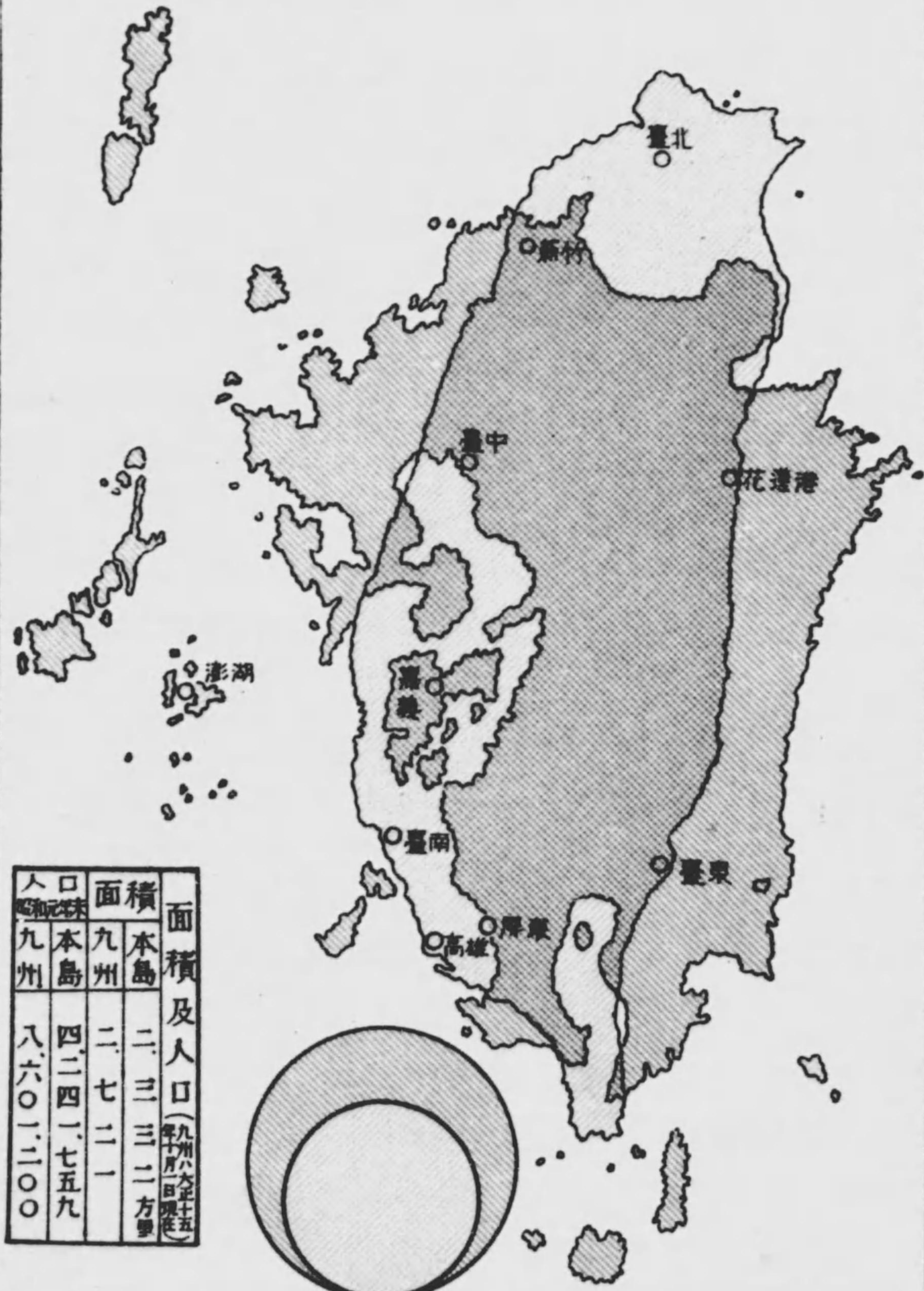
勢要覽



此行所寄贈本



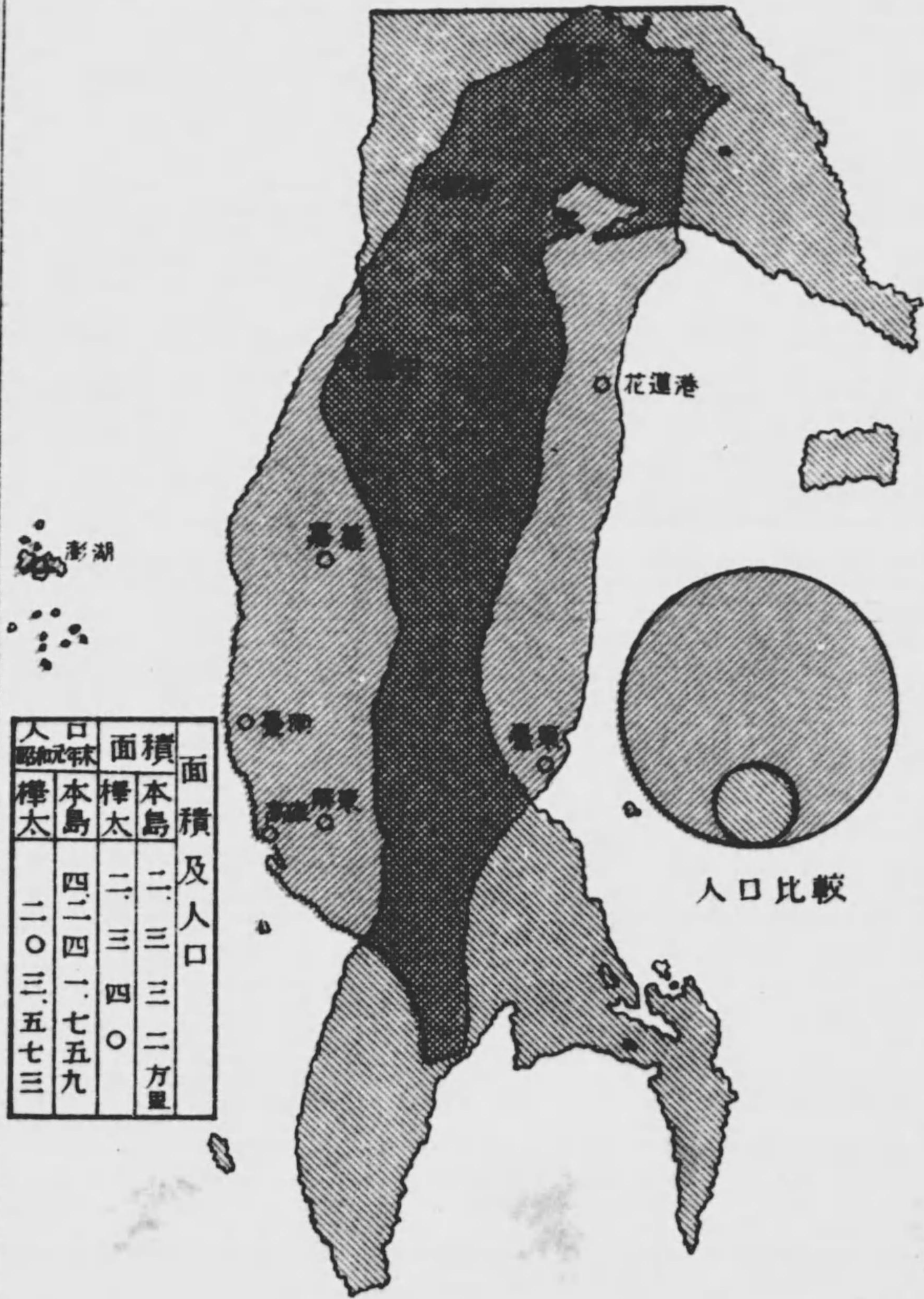
I 臺灣及九州面積並人口比較



人口	面積	面積及人口
九州	本島	九州(全土)
八、六〇一、二〇〇	四、二四一、七五九	二、三三三、二方里
	二、七二一	

人口比較

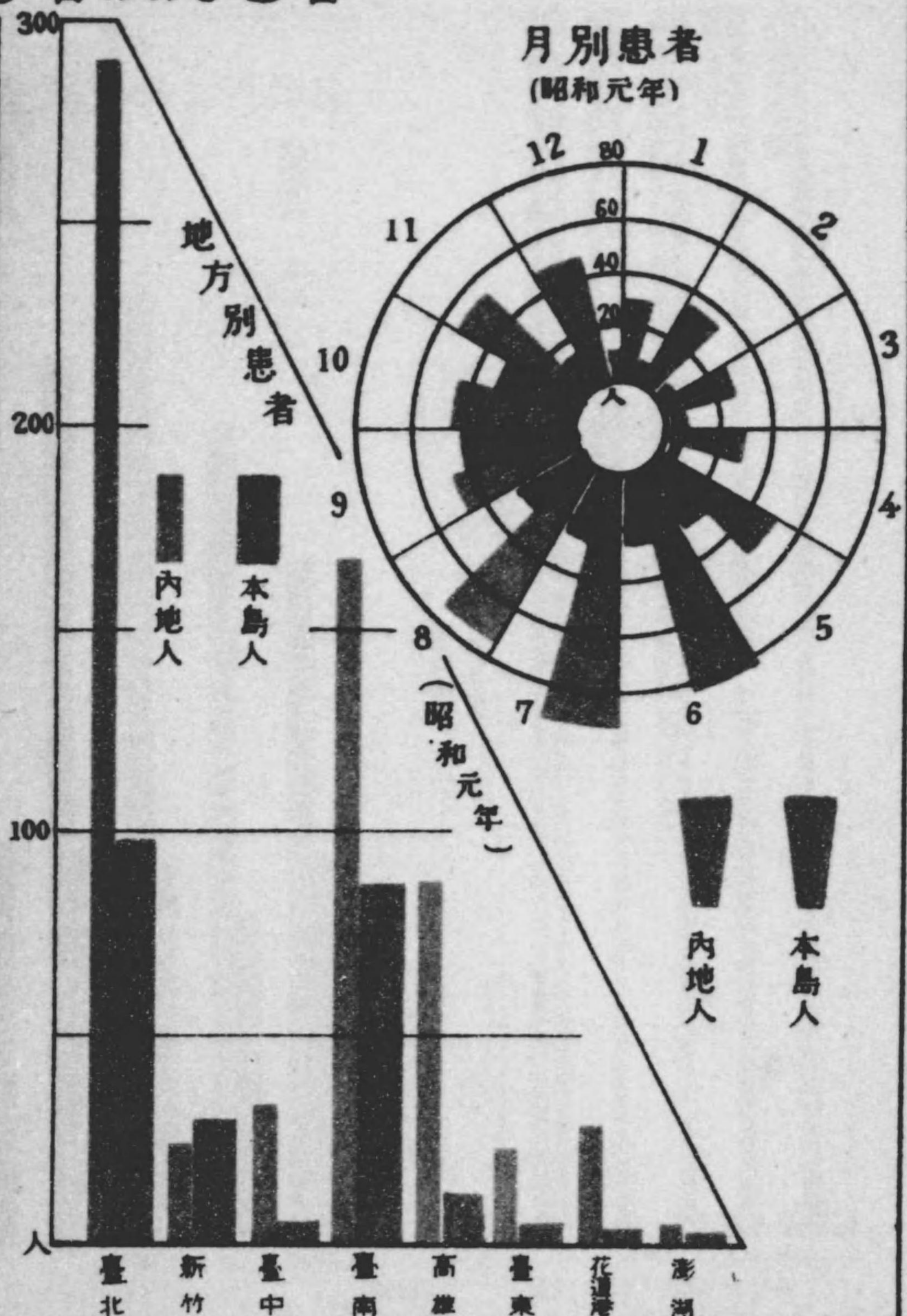
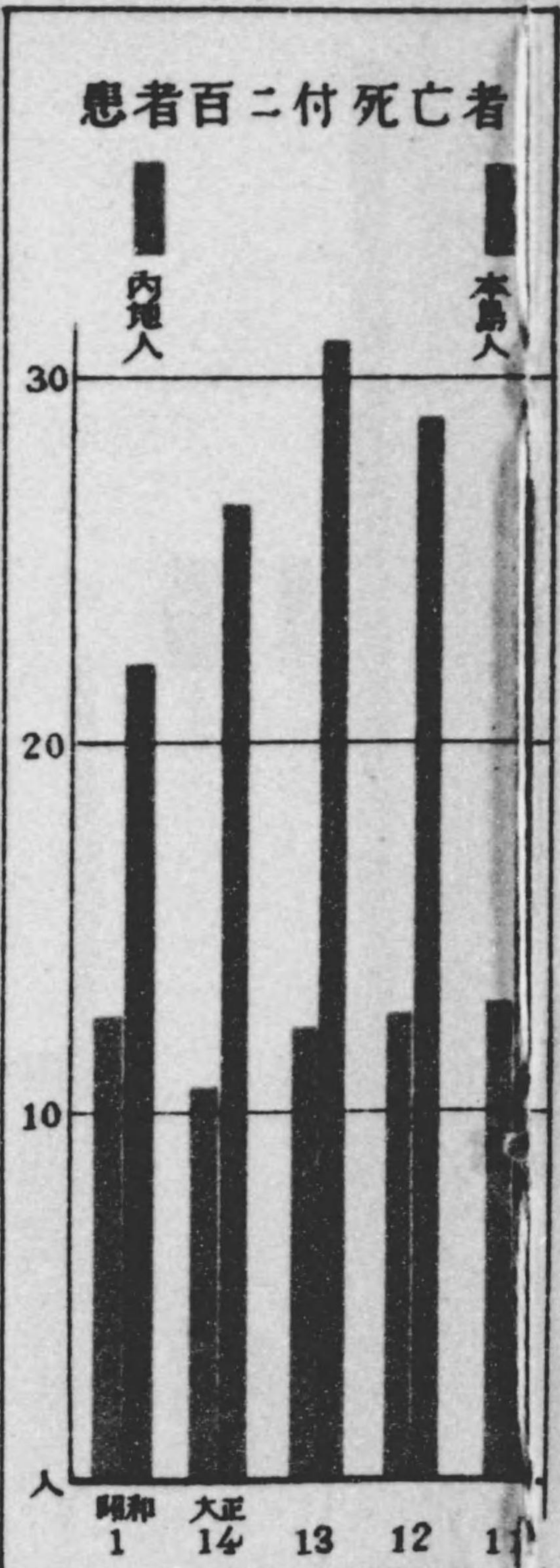
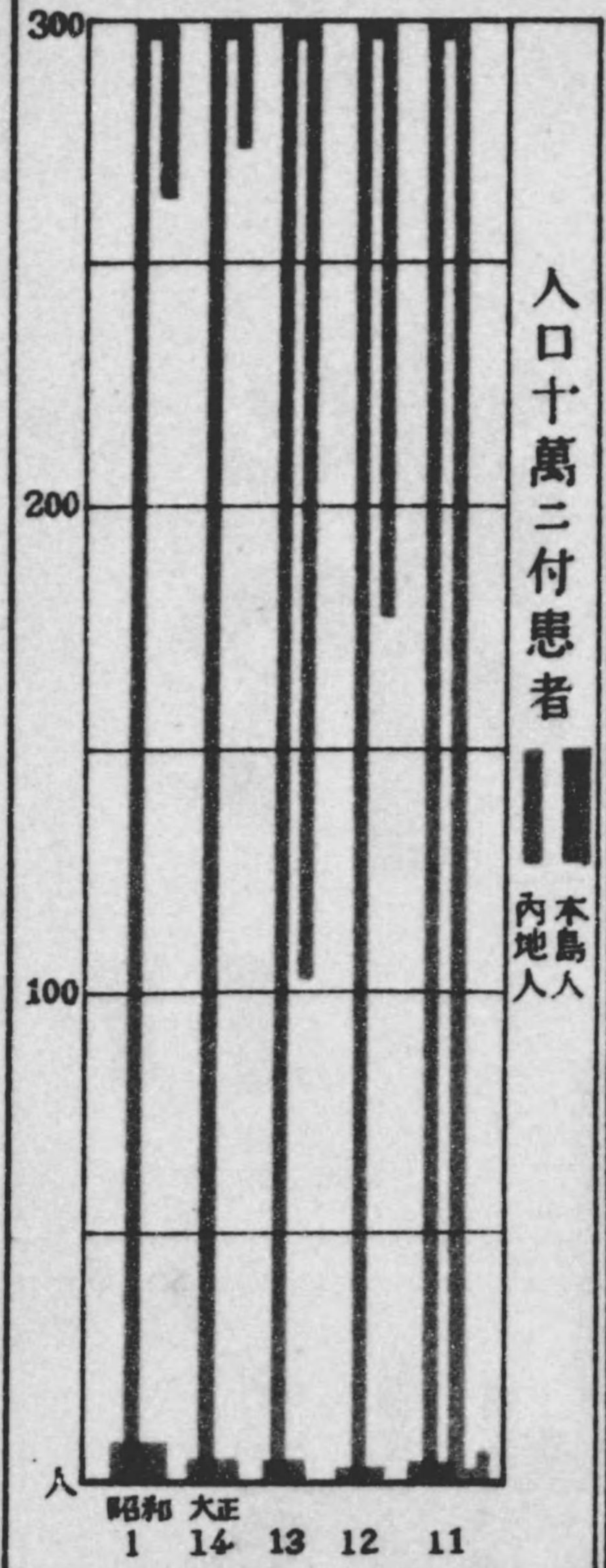
II 臺灣及樺太面積並人口比較

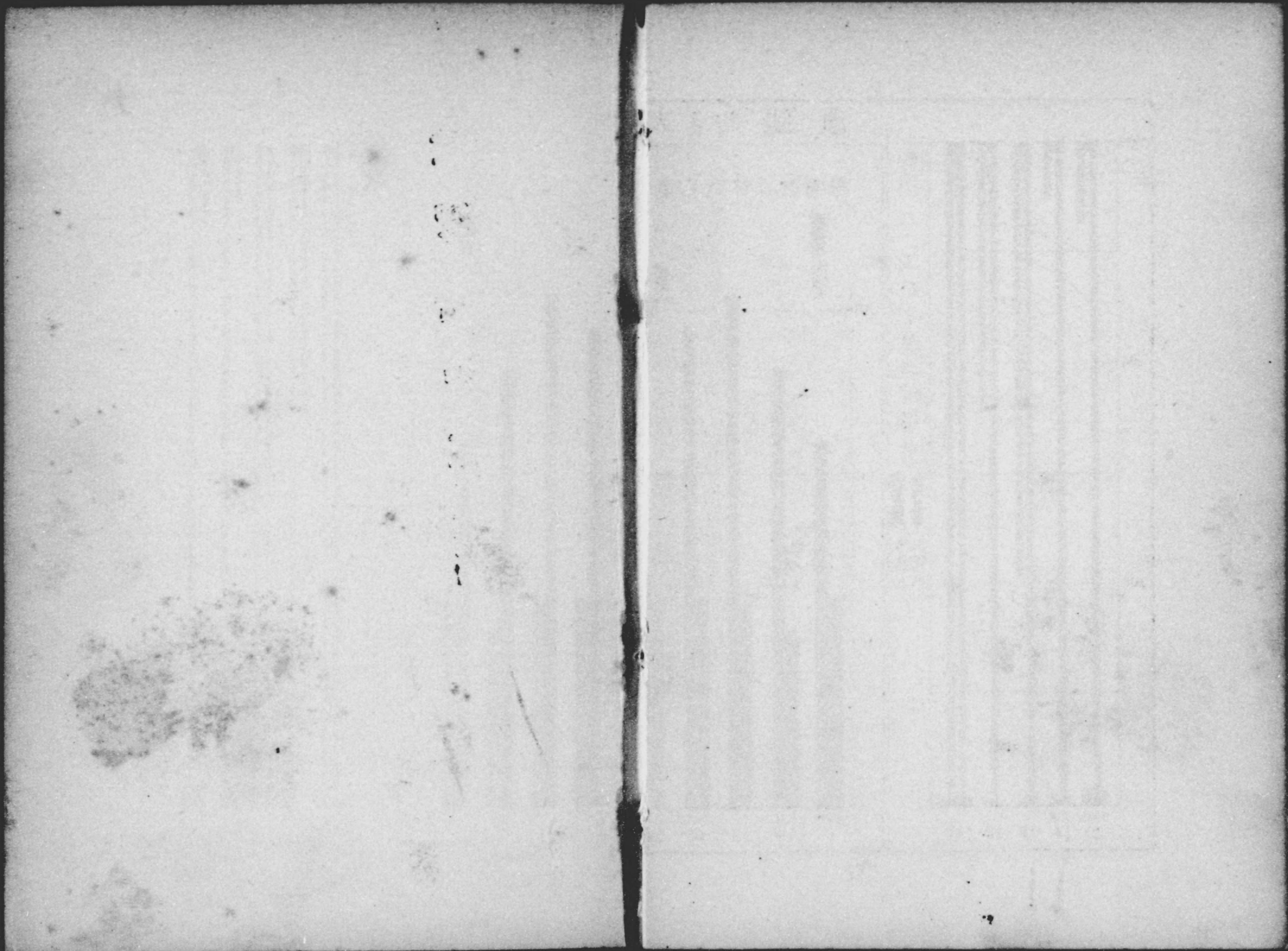


人口	面積	面積及人口
樺太	本島	樺太
二〇三、五七三	四、二四一、七五九	二、三三三、二方里
	二、三三四〇	



Ⅲ 腸チフス患者及死亡者





516-357

凡例

- 一 本書は、臺灣の現勢を知るの便に資せんが爲め、主要なる事項に就て、その統計的説明を試みたるものなり。
- 二 本書は、昭和元年(大正十五年)の事實を基礎としたるも、その最近の統計あるものは、努めて之を採り、又昭和元年(大正十五年)の事實不明のもの若は特に必要と認めたるものは、昭和元年(大正十五年)以前の統計をも採りたり。
- 三 本書は、主として臺灣の現勢を知るを目的とするも、特にその變遷進歩の狀態を説明するの必要ある事項に就ては、累年の統計をも擧げたり。
- 四 本書は、帝國に於ける臺灣の地位を説明するの便に供せんが爲め、その必要なる事項に就ては、内地府縣、北海道、朝鮮、樺太、關東州等との比較對照をも試みたり。

昭和三年五月

臺灣總督府

臺灣現勢要覽目次

一	位置	一
二	面積	四
三	山嶽	六
四	河川	一〇
五	土地の利用	三
六	氣温	四
七	雨量	七
八	人口	二〇
九	本籍別内地人	三
一〇	在外臺灣人	六
一一	在留外國人	六
一二	臺灣語を話す内地人	三
一三	國語を解する本島人	三
一四	婚姻、離婚、出生及死亡	三
一五	出生率	三
一六	死亡率	三
一七	人口の増加	三

一八	蕃人	四
一九	行政區劃	四
二〇	州及廳の面積	四
二一	州及廳の人口	四
二二	主要都市	五
二三	農業戶數	五
二四	耕地面積	五
二五	水利	六
二六	農產	六
二七	畜產	六
二八	林產	七
二九	礦產	七
三〇	水產	七
三一	工業	七
三二	糖業	七
三三	貿易	七
三四	對手國別外國貿易	八
三五	支那、香港及南洋貿易	八
三六	重要品別外國貿易	八

圖表

III II I	臺灣及九州面積並人口比較	三
	臺灣及樺太面積並人口比較	三
	腸チフス患者及死亡者	三
五一	最近十五年間の進歩	三
五〇	警察官署及職員	三
四九	郵便、電信、電話	三
四八	鐵道	三
四七	阿片吸食特許者	三
四六	ペストとマラリア	三
四五	水道	三
四四	衛生機關	三
四三	教育	三
四二	物價	三
四一	銀行	三
四〇	專賣	三
三九	財政	三
三八	港別貿易	三
三七	重要品別内地貿易	三

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

PHYSICS DEPARTMENT

臺灣現勢要覽

位置

臺灣は帝國の最南端に位し、臺灣本島、澎湖列島及其の他の附屬島嶼より成る。今之を經緯度に釋ゆるに、東經百十九度十八分より百二十二度六分、北緯二十一度四十五分より二十五度三十八分に至る。北は海上六百二十四哩にして九州の南端鹿兒島に達し、西は臺灣海峡を隔て、近く支那大陸に相接し、東は太平洋を隔て、遠く米大陸に相對し、南はバツシ―海峡を隔て、近く比律賓群島に相隣す。

一 經度及緯度

澎湖島	臺灣本島	經度(東經)	極東	臺北州基隆市棉花嶼東端	二三・〇六
緯度(北緯)	緯度(北緯)	極西	臺南州北港郡口湖庄新港西端	二〇・〇三	
極北	極南	極東	高雄州恒春郡七星岩南端	二二・四〇	
同	同	極西	臺北州基隆市彭佳嶼北端	二五・三六	
同	同	極東	澎湖廳湖西庄查母嶼東端	二九・四三	
同	同	極西	望安庄花嶼西端	二九・一八	
同	同	極東	望安庄大嶼南端	二三・二〇	
同	同	極西	白沙庄目斗嶼北端	二三・四六	

二 距

離 基隆を基點とする直航湮程

盤西海麻香上汕厦福大釜横神門長鹿那

尼

兒

谷貢防刺港海頭門州連山濱戶司崎島霸

(香港經由)

(鹿兒島沖通過)
(門司經由)

一八九五 一三〇〇 九六一 七六六 四七九 四一八 三二八 三三六 一五二 八五〇 八六二 一三三七 九八二 七三九 六三三 六二四 三四四哩

新嘉坡
バタビヤ

一八三四
二六九四

二面積

臺灣の面積は二千三百三十二方里にして、帝國の總面積四萬三千六百七十七方里中その五分三厘を占め、九州よりは稍や小さく、樺太と伯仲し、朝鮮に比すれば約その六分の一に當る。尙ほ之を列國の面積に比すれば、瑞西(二千六百七十八方里)とサルバドル(二千二百十三方里)との中間に位す。

總數	面積	百分比
臺灣	四三六七	一〇〇〇
朝鮮	二二三三	五三
樺太	一四二六五	三三七
北海道	二三四〇	五四
北海	五七二四	一三二
内地府縣	一九〇二六	四三五

本表の外租借地として關東州(州内、鐵道附屬地)の面積二百四十一方里及南洋委任統治區域の面積百三十九方里あり。本表は帝國統計年鑑に依る。

三山嶽

臺灣は帝國第一の高山新高山を始めとし、海拔一萬尺以上のもの四十八座、九千尺級のもの十七座、八千尺級のもの二十四座、七千尺級のもの二十六座を有す。故に七千尺以上の高山の總數は百十五座の多きに達し、所謂「高山國」の名に背かずして熱帶、暖帶、溫帶、寒帶等各種の林相を有す。

帝國の全領土を通して一萬尺以上の高山は總數六十一座を算し、就中臺灣四十八座を占め、内地は僅かに十三座を有し、北海道、朝鮮、樺太は共に之を缺く。即ち新高山は一萬三千三十五尺を以て第一位を占め、富士山は漸く第六位に在り、内地第二の高山北嶽は僅かに四十一位を占むるに過ぎず。

山名	海面よりの高さ 尺	順位
新高山	一三〇三五	一
次高山	三九七二	二
秀姑巒山	二六五〇	三
マボラス山	二五六〇	四
南湖大山	二五三二	五
富士山(内地)	二四六七	六
中央尖山	二二六〇	七
關山	三二〇〇	八

大水窟山	二二〇三八	(三、六四五)	九
奇萊主山北峰	二一八九五	(三、六〇五)	一〇
東郡大山	二一八九五	(三、六〇五)	一一
大雪山	二一八八〇	(三、六〇〇)	一二
大霸尖山	二一七九二	(三、五七三)	一三
雲霧峰	二一七七八	(三、五六九)	一四
奇萊主山	二一六九五	(三、五四四)	一五
東巒大山	二一四三六	(三、四六五)	一六
合歡山	二一四〇〇	(三、三九四)	一七
北合歡山	二一四〇〇	(三、三九四)	一八
東合歡山	二一四〇〇	(三、三九四)	一九
南玉	二一九九	(三、三九一)	二〇
桃山	二一八八	(三、三九〇)	二一
シノカン山	二一五七	(三、三八一)	二二
畢祿山	二一五二	(三、三七九)	二三
丹大山	二一三〇	(三、三七二)	二四
白姑大山	二一〇五	(三、三四九)	二五
奇萊主山南峰	二一〇〇	(三、三三五)	二六
南双頭山	二〇〇〇	(三、三三三)	二七

能高山南峰	11,000	(三,三三三)	二八
卑南主山	10,905	(三,三〇五)	二元
千卓萬山	10,903	(三,三〇四)	三〇
カシバナ山	10,869	(三,二九四)	三二
郡大	10,865	(三,二九二)	三三
タロコ大山	10,863	(三,二九二)	三三
卓社大	10,816	(三,二七八)	三四
小關	10,740	(三,二五五)	三五
能高	10,732	(三,二五二)	三六
屏風	10,673	(三,二三四)	三七
大武	10,665	(三,二三三)	三八
尖	10,633	(三,二三三)	三九
バトツノ山	10,630	(三,二三二)	四〇
北嶽(内地)	10,534	(三,一九二)	四一
間ヶ嶽(内地)	10,524	(三,一九九)	四二
鎗ヶ嶽(内地)	10,492	(三,一七五)	四三
槍ヶ岳(内地)	10,487	(三,一七八)	四四
ハイノトナシ山	10,478	(三,一七五)	四五
マピーサン山	10,450	(三,一六七)	四六

白石山	10,354	(三,一三八)	四七
ウワノシン山	10,334	(三,一三二)	四八
赤石山(内地)	10,296	(三,一一〇)	四九
奥穂高岳(内地)	10,240	(三,一〇三)	五〇
東俣山(内地)	10,222	(三,〇九五)	五一
穂高岳(内地)	10,197	(三,〇九〇)	五二
安東郡山	10,193	(三,〇八九)	五三
巒大山	10,150	(三,〇七六)	五四
御嶽山(内地)	10,109	(三,〇六三)	五五
關門山	10,073	(三,〇五二)	五六
大石公山	10,060	(三,〇四八)	五七
白根山(内地)	10,055	(三,〇四七)	五八
小雪山	10,043	(三,〇四三)	五九
仙丈ヶ嶽(内地)	10,009	(三,〇三三)	六〇
南嶽(内地)	10,008	(三,〇三三)	六一

内地の分は第四十五回国勢一班に依る。

四河川

臺灣は幅員狭く、その最も廣き部分さ雖、僅かに四十里内外に過ぎず、且つ高峰南北に貫通するを以て、河川の發源孰れも近く、舟楫の便は多く望むべからず。流域二十里以上のもの僅かに十を算し、最長の河川たる濁水溪にして漸く四十二里に過ぎず。

濁水溪	四二〇里	(二六四九) 斤
下淡水溪	三九七	(二五五九)
曾文溪	三三七	(二三三三)
淡水河	三三一	(二三〇〇)
大甲溪	三〇〇	(二七八)
烏溪	二八六	(二二三)
八獎溪	二八三	(二二二)
秀姑巒溪	三三六	(八八八)
卑南溪	二二五	(八四四)
大安溪	二〇五	(八〇五)

本表は流域二十里以上のものゝみを掲ぐ。

五 土地の利用

臺灣の總面積は三百六十二萬七千町步(三百七十萬八千甲)にして内、耕地七十九萬二千町步(八十一萬四千甲)、林野二百五十九萬九千町步(二百六十五萬八千甲)、その他二十三萬一千町步(二十三萬六千甲)なり。

今之を内地其の他と比較するに、總面積に對する耕地の割合最も大なるは、關東州の五割三分八厘にして、臺灣は二割二分を以て之に亞き、樺太の六厘最も小なり。林野に於ては、樺太の八割九分四厘最も大にして、臺灣は七割一分六厘を以て第二位を占め、關東州の二割五分三厘最も小なり。耕地及林野以外の土地の割合最も大なるは内地府縣の二割四分八厘にして、臺灣の六分四厘最も小なり。

實數	耕地			百分比		
	耕地	林野	其他	耕地	林野	其他
臺灣	七九六、六二六町	二、五九九、五七九町	二、三二一、二八町	三三〇	七二六	六四
朝鮮	四六〇、四六六	一、五八八、三〇〇	一、七七二、五二六	二〇七	七二二	八〇
樺太	三三、〇三三	三、三三三、四三三	三、六二六、二四	〇六	八九四	一〇〇
關東州	二〇一、七五五	九四、九〇一	七、八四九、九	五三八	二五三	二〇九
北海道	七、八四、三六九	六、二六八、二五	一、八四八、九四二	八八	七〇四	二〇八
内地府縣	五、二八九、五八	一、六九四、九九五	七、三三七、七六七	二七九	五七三	二四八
耕地は昭和元年末現在なり。						

林野の臺灣、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は昭和元年末現在、朝鮮は昭和二年五月末現在、内地及北海道は大正十三年末現在なり。朝鮮、樺太、關東州は同應統計書に依る。北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

六氣 温

臺灣は北回歸線に跨り、半は熱帶圈に位するが故に、内地に比すれば夏季長く、冬季短きも、その最高氣温は敢て内地より高しと謂ふにあらず。而も冬季は頗る暖かにして、高山ならされは降雪なく、北部の平地に於ては偶々霜を見る事なしとせざるも極て稀なり。今内地其他と比較するに、累年平均氣温は我臺灣最も高きも、最高極數の氣温に至りては内地其他の部分に却つて高き處あり。即ち臺東の三十九度(華氏百二度二分)は新潟の三十九度一分(華氏百二度四分)より一分低く、又臺南の三十六度九分(華氏九十八度四分)は京城の三十七度五分(華氏九十九度五分)より一分低く、臺中の三十七度二分(華氏九十九度)は大坂の三十七度六分(華氏九十九度七分)より一分低く、臺中の三十七度二分(華氏九十九度)は釜山、旭川と同じし、及澎湖の三十三度五分(華氏九十二度三分)は大泊、函館を除けば他の何れの地方よりも低し。

累年

臺	昭和元年平均		平均		最高の極		最低の極			
	攝氏	華氏	攝氏	華氏	攝氏	華氏	年月	攝氏	華氏	年月
臺南	23.9	73.2	23.0	73.4	36.9	98.4	5-7	2.4	36.3	7-12
臺東	23.2	73.6	23.4	74.1	39.0	102.2	3-7	7.4	45.3	7-11
恒春	24.3	75.6	24.3	75.7	35.0	95.0	2-15	9.5	49.1	2-12

澎湖	臺中	臺北	基隆	朝鮮	釜山	京城	大津	樺太	大泊	關東	旅順	北海道	函館	札幌	旭川	内地府縣	那覇	長崎
23.8	23.2	22.5	22.5	22.5	23.1	20.6	7.9	2.7	2.7	2.7	10.4	8.5	6.7	5.2	5.2	2.5	2.5	15.2
73.0	73.0	70.7	70.7	70.7	55.6	51.1	46.2	36.9	36.9	36.9	50.7	47.3	44.1	41.4	41.4	70.7	70.7	59.4
23.6	23.1	22.6	22.6	22.6	13.5	10.8	7.9	2.9	2.9	2.9	10.2	8.5	6.9	5.2	5.2	23.2	23.2	15.7
72.7	71.8	70.9	70.9	70.9	56.3	51.4	46.2	37.2	37.2	37.2	50.4	47.3	44.4	41.4	41.4	71.8	71.8	60.3
33.5	32.2	31.6	31.6	31.6	35.0	37.5	37.5	29.2	29.2	29.2	35.4	33.5	35.5	35.0	35.0	35.5	35.5	36.7
92.3	91.0	91.5	91.5	91.5	95.0	99.5	99.5	84.6	84.6	84.6	95.7	92.3	95.9	95.0	95.0	95.9	95.9	98.1
4-18	3-18	1-15	1-15	1-15	9-18	8-18	8-17	3-18	3-18	3-18	8-18	3-18	3-18	3-17	9-17	5-17	5-17	2-18
7.3	1.0	0.2	0.2	0.2	24.0	33.3	24.6	37.7	37.7	37.7	29.3	27.7	27.0	24.0	24.0	4.9	4.9	5.6
45.1	30.2	31.6	31.6	31.6	6.8	8.1	22.3	36.9	36.9	36.9	27	27.1	26.6	24.8	24.8	40.8	40.8	29
34-12	34-12	34-12	34-12	34-12	4-11	9-11	8-11	4-11	4-11	4-11	4-12	24-11	21-11	11-11	35-11	7-12	7-12	4-11

大	阪	一四七	五八五	一五二	五九二	三七六	九九七	四三二	二七二	一九二	二四一
東	京	一三六	五六五	一三九	五七〇	三六六	九七九	一九一	七八二	一七二	七一
新	潟	一三三	五四〇	一三六	五四七	三九一	一〇三四	四一八	二九七	一四五	三五二
青	森	九二	四八六	九三	四八七	三六〇	九六八	四一八	二九〇	二二	二四二

(二)は零點下を示す。

七 雨 量

臺灣は南北に依り其の降雨期を異にす。即ち北部は十月より翌年三月迄の冬季六箇月、南部は五月より九月に至る夏期五箇月を雨期とす。北部は基隆附近最も降雨量多く、基隆に近き暖暖は一年五千耗を以て第一位を占め、且つ世界有数の降雨地として知らる。南部に於ては潮州郡蕃地クワルスの五千三百耗最多量を示し、降雨量の最も少きは澎湖島にして一年の總量九百六十耗なり。更に之を内地其の他と比較するに、臺灣は全島を通して一般に他の地方よりも降雨量多し。

恒 春 灣
 蕃 地 クワ ル ス
 臺 東
 澎 湖 南
 阿 山
 臺 里 中

總 昭 和 元 年 量	一、六三四	五、〇二七	一、八〇五	一、五〇一	一、〇三四	三、三〇八	一、六二一
總 累 年 平 均 量	二、二四二	五、三五二	一、八〇七	一、七〇八	九六一	三、九四八	一、六八四
最 多 日 量	一八六	四八〇	一五七	一七三	一三三	一八九	一三四
昭 和 元 年 最 多 日 量 月 日	五、一三	九、一六	一〇、一八	八、一七	五、一三	五、一六	四、一六

青新東

森渴京

一六二四
一九〇九
一二七七

一三九四
一八〇八
一五七四

六一
一一二
七一

七一三
七一九
九一七

大長那 旭札函 北 關 樺 朝
地 府 海 東 大 城 京 釜 暖 基 臺

阪崎霸縣川幌館道順州泊太津城山鮮暖隆北

一二三六
二〇三七
一四七一
一三六〇
一三五九
一四四二
八九八
六四七
七三三
一八三三
一七四四
五〇二八
二二二七
二一〇三

一三七二
一九三八
二二四二
一〇五五
一〇三三
一一五七
五七六
七四二
六九二
一二三三
一四三〇
五〇三六
二八八九
二〇七七

六六
一三六
一三七
九二
七二
二六
二六
四
九二
一五四
一五八
三五四
一〇六
一九九

一〇一六
九一七
五一一〇
九一〇
一〇一
八一七
七一三〇
九一五
一〇一八
七一六
九一三
一〇一八
八一三
一〇一九

八人口

臺灣の總人口は昭和元年末現在四百二十四萬人にして内、内地人十九萬五千人、本島人三百九十二萬三千人(平地居住の蕃人を含む)、蕃人八萬六千人(蕃地居住者のみ)、外國人三萬五千人なり。

昭和元年末現在帝國の總人口は八千四百萬人を算し、臺灣は四百二十四萬人(蕃地居住の蕃人を含む)にして、實に其の五分を占む。
更に臺灣の人口を列國のそれに比すれば、勃爾牙利(五、四八三、〇〇〇)と瑞西(三、九五九、〇〇〇)との中間に位す。

一 種族別人口 (昭和元年末現在)

種族	總數	男	女	百分比例
總數	四二四、七五九	二一七、六六六	二〇六、一〇三	100.0
内地人	一九五、七六九	一〇五、一四三	九〇、六二六	四六
本島人	三、九三三、七五二	二、〇〇二、七八七	一、九三〇、九六五	九二六
蕃人	八六、七三三	四三、六五八	四三、〇七五	二〇
外國人	三五、〇五五	二五、〇六八	一〇、四三七	〇八

本島人中には平地の蕃社に居住する蕃人五萬千八百九十四人を合算せり。故に本表の蕃人には蕃地の蕃社に居住する者のみを掲上せり。

二 内地其他との人口比較 (昭和元年末現在)

地域	總數	實數	百分比例	一方里に付
臺灣	四二四、七五九	四二四、七五九	100.0	一九五
朝鮮	一九、〇三、九〇〇	一九、〇三、九〇〇	三三七	一八九 <small>の平地面積のみなれば</small> 三、三四一
樺太	二〇三、七五三	二〇三、七五三	〇三	七
北海道	二、五二七、七〇〇	二、五二七、七〇〇	三〇	四四二
内地府縣	五七、九三、九〇〇	五七、九三、九〇〇	六九二	三、〇五〇

本表の外租借地としての關東州(州内、鐵道附屬地)は人口百五萬八千八百五十一人を有し、一方里に付人口四千三百九十四人及南洋委任統治區域は人口五萬六千二百四十六人を有し、一方里に付人口四百五人を算す。
朝鮮、樺太、關東州及南洋委任統治區域は同應統計書に依る。
北海道、内地府縣は大正十五年十月一日現在にして帝國統計年鑑に依る。

九 本籍別内地人

臺灣在住内地人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、十六萬四千人にして内、熊本縣の一萬六千三百五十三人第一位を占め鹿兒島縣は一萬六千二百七十二人を以て之に亞き、福岡縣は遙かに下りて八千八百九十八人を以て第三位に在り、廣島、山口の兩縣順次に亞き其の最も少きは青森縣の二百八十二人なり。

府縣	人口	百分比	順位
熊本縣	一六、三五三	一〇・一	一
鹿兒島	一六、二七二	九・九	二
福岡縣	八、八九八	五・四	三
廣島	八、四〇一	五・二	四
山形	七、四六三	四・五	五
佐賀	六、七八〇	四・一	六
東京	六、三四七	三・九	七
長崎	六、〇三八	三・七	八
宮城	五、六五七	三・四	九
大阪府	四、六七五	二・八	一〇
分府	四、五三四	二・八	一一

新兵 愛愛 岡宮 高岐 沖石 香福 島靜 和京 茨德 三
歌

庫湯 知媛 山崎 知崎 阜繩 川川 島根 岡山 都城 島重

四、四五六	二七	三
四、三三〇	二六	三
三、八二五	二六	三
三、七三二	二三	三
三、一三四	一九	三
二、八二〇	一七	三
二、七八九	一七	三
二、六五〇	一六	三
二、四三三	一五	三
二、四二八	一五	三
二、四〇一	一五	三
二、三九〇	一五	三
二、三二七	一四	三
二、二九五	一四	三
二、二〇六	一三	三
二、一四二	一三	三
二、一三三	一三	三
一、九七九	一二	三
一、九二三	一二	三

長福千神滋山鳥山富山群山埼奈北岩秋青
 野井葉川賀形取山梨馬玉良道木手田森
 奈

野井葉川賀形取山梨馬玉良道木手田森

内地人總數十六萬四千二百六十六人中、
 不詳九人を除く。

一八七三
 一七六六
 一七四九
 一五六六
 一四九〇
 一三六六
 一三四七
 一〇六二
 一〇五三
 一〇三三
 一〇三三
 九二二
 八九五
 八二七
 七三六
 二六二

一〇三
 〇〇四
 〇〇五
 〇〇五
 〇〇六
 〇〇六
 〇〇六
 〇〇六
 〇〇六
 〇〇八
 〇〇八
 〇〇九
 〇一〇
 〇一〇
 〇一三
 〇一三
 〇一三

四七
 四六
 四四
 四三
 四二
 四一
 四〇
 三九
 三八
 三七
 三六
 三五
 三四
 三三
 三二

内地に本籍を有せざる者二十六人、本籍

一〇 在外臺灣人

在外臺灣人の總數は、大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、四千七百八十五人にしてその大部分は支那に在留す。即ち支那に留臺灣人の總數は四千二百三十六人にして、就中その三千八十五人は對岸廈門に居住し、福州は七百六十六人、汕頭は二百三十六人を算す。支那以外の地方に在りては、爪哇の二百十八人第一位を占め、海峽植民地の百五人に亞く。

總數	男	女
四、七八五	三、〇一五	一、七七〇
九	四	五
四、三三六	二、六二五	一、六一一
三、〇八五	二、九二一	一、二七四
七六六	四四八	三二八
二、三六	一、六三	七三
三	八	三
二八	八五	三三
二八	九	三

海峽植民地	新嘉坡	沙ヨホル州	其他	緬甸	香港	暹羅	比瀛	爪哇	智律
一〇五	三三	三三	七	六	五	三	三	一	一
八	六	六	九	八	五	五	二	一	一
二	三	三	七	六	五	五	三	一	一

一一 在留外國人

臺灣在留外國人の總數は大正九年十月一日施行の國勢調査の結果に依れば、二萬三千六百六十四人なり、今之が國籍を釋ゆるに、支那人はその大部分を占め二萬三千四百六十七人を算し、英吉利人の八十九人、北米合衆國人の四十二人順次之に亞く。

佛蘭西	瑞典	獨逸	比利時	日本	英領印度	智利	西班牙	北美合衆國	英吉利	支那	總數	
西	典	亞	逸	寶	ラ	度	利	牙	國	利	那	數

一	二	二	三	四	四	五	〇	六	四	九	三 四 七	三 六 四
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	-------------	-------------

濠洲	波蘭	伯刺西	墨西哥	加拿大	希臘	希威	諾威	丁抹	葡牙
----	----	-----	-----	-----	----	----	----	----	----

本表の外、外國に國籍を有せざる者七百九十九人、國籍不詳三人あり。
本表には調査當日基隆碇泊の外國船乘組員をも含むを以て國籍數比較的多し。

一二 臺灣語を話す内地人

内地人にして臺灣語を話すもの、数は、明治三十八年の六千八百二十九人より、大正四年の一萬六千五百九十一人に増加し、更に大正九年には一萬七千二百七十三人に増加したるも、その内地人千に對する割合は、大正四年の百二十二・五人五分より、大正九年の百五人二分に減退したり。

年	總數		指數	平均	
	男	女		男	女
明治三十八年	六、八二九	六、〇〇〇	一〇〇	二九・二	一七・八
大正四年	一六、五九一	一三、四〇三	二四三	二三・五	一七・九
同 九年	一七、七三三	一四、九六六	二五三	一〇五・二	一六・六

男女別内地人千に付

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

一三 國語を解する本島人

本島人にして國語を解するもの、數は、明治三十八年の一萬一千二百七十人より、大正四年の五萬四千三百三十七人に増加し、更に大正九年には九萬九千六十五人に増加したるも、尙ほ本島人千に對し僅かに二十八人六分を算するに過ぎず。

年	總數		指數	平均	
	男	女		男	女
明治三十八年	一、二七〇	一〇、八〇二	一〇〇	三八	六・八
大正四年	五、三三七	五〇、一三三	四三三	一六・三	二九・一
同 九年	九、〇六五	八七、八九七	八七九	二六・六	四三・三

男女別本島人千に付

本表は第一回及第二回戸口調査並に第一回國勢調査の結果にして何れも十月一日現在なり。

一四 婚姻、離婚、出生及死亡

臺灣に於ける最近十五年間の婚姻、離婚、出生及死亡を觀るに、人口千に付婚姻は大正元年の十一件三分より大正十四年には九件三分に減少せしも、昭和元年には大正元年と同数の十一件三分に増加し、離婚は同しく一件五分より昭和元年には一件二分に減少し、出生は大體に於て増加の傾向を有し、大正元年の四十一人九分より昭和元年には四十四人一分に増加せり。死亡は年に依り非常の相違あり、大正七年の如き三十八人八分の多きに達したるも、昭和元年には二十二人六分に減退したり。従つて出生の死亡超過數は年により甚だしき懸隔あり、大正七年の如き僅かに二萬人に過ぎざりしか、昭和元年には八萬九千人に達したり。

大正元年	同二年	同三年	同四年	同五年	同六年	同七年	同八年
婚姻	三七,九一九	三六,一六七	三三,九七七	三八,五六六	三七,六〇四	三八,〇九五	四〇,九〇二
離婚	五,〇八二	五,一六〇	四,六六四	五,一九五	五,四四五	四,九六八	五,一六五
出生(生産)	一四〇,四九八	一四一,三七九	一四六,一三六	一四二,五〇五	一三三,七七七	一四八,二〇九	一四五,一六二
死亡	八四,九六三	八六,六一〇	九七,五一一	一一二,二二三	一〇二,五一九	九七,九四九	一二四,六七七
自然増加(出生超過)	五五,五三五	五四,七六九	四八,六二五	三〇,三八二	三二,一九八	五〇,二六〇	二〇,四八五

同九年	同十年	同十一年	同十二年	同十三年	同十四年	昭和元年
婚姻	四〇,九二五	四〇,八二九	三七,八三一	三九,四八〇	四二,二〇一	三七,六〇三
離婚	四,七二二	四,六五八	四,二二五	四,三三八	四,四三七	四,〇六六
出生(生産)	一四七,三〇八	一六一,九八七	一六一,八八九	一五四,〇七八	一六六,一八三	一六六,九〇一
死亡	一一九,四七七	九一,五二三	九五,三七二	八四,一〇八	九八,四〇五	九八,〇四三
自然増加(出生超過)	二七,八三一	七〇,四七四	六六,四七五	六九,九七〇	六七,七七八	六八,八五八

一五 出生率

臺灣の出生率は之を最近十五年間に就て観るに、年に依りて増減ありと雖概して増加の趨勢にあり、昭和元年は人口千に付四十四人一分を以て最高度を示す。
 更に之を内地其の他と比較するに、臺灣は其の割合最も高くして、大正九年迄は北海道と稍や一致し、内地府縣は我臺灣に於ける内地人のみの出生率と相似たる所あり。又列國中出生率の最も高きは智利の四十人(大正十四年)なるか故に、我臺灣の出生率は世界に於て最も高き部類に屬す。

一 出生率(人口千に付)

年	平均	内地人	本島人	外國人
大正元年	四一九	二九八	四三二	二二八
二年	四一四	三〇七	四二〇	一五五
三年	四二一	三〇八	四一八	一六〇
四年	四〇九	三三七	四一四	一八八
五年	三八一	三三五	三八四	一八六
六年	四一六	三七四	四一九	一九二
七年	四〇五	三五四	四〇九	二〇三
八年	三九二	三三二	三九六	二〇一

二 内地其の他との出生率累年比較 (人口千に付)

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
同 同 十九年	四〇二	四〇二	三三八	四〇六	四〇六	二二六
同 同 十八年	四三二	四三二	三五九	四三七	四三七	二四五
同 同 十七年	四三三	四三三	三六〇	四二八	四二八	二四七
同 同 十六年	三九六	三九六	三五〇	三九九	三九九	二二七
同 同 十五年	四一〇	四一〇	三六一	四三四	四三四	二二九
同 同 十四年	四二二	四二二	三四六	四一五	四一五	二七六
同 同 十三年	二八二	二八二	三三九	四〇九	四〇九	二七九
同 同 十二年	二七三	二七三	三四七	二九〇	四一〇	二七九
同 同 十一年	二七三	二七三	三三七	三〇九	四一〇	二七九
同 同 十年	二八二	二八二	三二一	三〇九	四一九	二七九
同 同 九年	三三八	三三八	三二一	三〇九	四一九	二七九
同 同 八年	四二六	四二六	三二一	三〇九	四一九	二七九
同 同 七年	四〇五	四〇五	三二一	二六九	四〇四	二七九
同 同 六年	三九二	三九二	二八八	二五六	三七〇	三〇八
同 同 五年	四〇九	四〇九	二七三	二九〇	四一〇	二七九
同 同 四年	四二二	四二二	三二九	三二五	四〇九	二七九
同 同 三年	四二二	四二二	三二九	三二五	四〇九	二七九
同 同 二年	四二二	四二二	三二九	三二五	四〇九	二七九
同 同 一年	四二二	四二二	三二九	三二五	四〇九	二七九

同 九年	四〇二	二七六	三五二	二六三	四一三	三四七
同 十年	四三三	二九七	三三二	二五四	三八五	三四九
同 十一年	四三三	三三八	三三三	二六四	三七四	三四三
同 十二年	三九六	四〇二	三三二	二五四	三五八	三四九
同 十三年	四二〇	三八二	三四三	二七三	三四六	三四九
同 十四年	四二二	三八〇	三三〇	二八七	三九三	三四八
昭和元年	四二二	三五四	三三三	二八九	三九〇	三四六

朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同應統計書に依り算出す。
北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依り算出す。

一六 死亡率

臺灣の死亡率は之を最近十五年間に就て觀るに、是れ亦高低常ならずと雖、大正十二年には著しく低下し、人口千に付二十一人六分を以て最低の記録を示せり。内地人の死亡率は之を本島人に比すれば甚だ低く、昭和元年には本島人二十三人一分なるに對し、内地人は僅かに十二人六分を示せり。

更に之を内地其他と比較するに、大體に於て死亡率の最も低きは關東州にして、北海道之に亞き、朝鮮は内地府縣と稍や一致し、最近は我臺灣最も高し。又列國中死亡率の最も高きは、智利にして大正十四年には二十七人八分を示せり。

一 死亡率(人口千に付)

年	平均	内地人	本島人	外國人
大正元年	二五三	一五八	二五八	一五四
同 二年	二五三	一五三	二五八	一三一
同 三年	二六一	一五〇	二八七	一九五
同 四年	三三二	二七三	三三九	一九四
同 五年	二九二	一六〇	二九八	一六八
同 六年	二七五	一六五	二八〇	一七七
同 七年	三四八	一九六	三五五	二二七
同 八年	二七三	一六八	二七八	二〇八

昭和九年	昭和十年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年	昭和十八年	昭和十九年
三三六	三四二	三四九	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇	三五〇
二九二	二九二	二九二	二九二	二九二	二九二	二九二	二九二	二九二	二九二	二九二
二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇	二五〇
一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六	一九六
二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二	二〇二

二 内地其の他との死亡率累年比較(人口千に付)

大正元年	大正二年	大正三年	大正四年	大正五年	大正六年	大正七年	大正八年	大正九年
二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三	二五三
二八〇	二八〇	二八〇	二八〇	二八〇	二八〇	二八〇	二八〇	二八〇
二八五	二八五	二八五	二八五	二八五	二八五	二八五	二八五	二八五
一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七	一九七
二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八	二〇八
一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八	一九八
一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三	一九三
二〇四	二〇四	二〇四	二〇四	二〇四	二〇四	二〇四	二〇四	二〇四
二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇	二〇〇

昭和元年	昭和十一年	昭和十二年	昭和十三年	昭和十四年	昭和十五年	昭和十六年	昭和十七年	昭和十八年	昭和十九年
三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六	三三六
二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三
一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一九〇
一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六
一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二	一七二
二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三	二〇三

朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同廳統計書に依り算出す。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依り算出す。

一七 人口の増加

臺灣の人口は、明治三十八年十月一日施行の第一回戸口調査の結果に依れば、三百萬なりしものか、大正元年末には三百三十五萬に増加し、更に昭和元年末には四百十五萬に達し過去十五年間に二割四分の増加を示せり。

更に人口増加の趨勢を内地其の他と比較するに、増加の割合最も大なるは樺太にして、關東州之に亞き、北海道は第三位を占め、大正八年迄は臺灣と内地とは殆んど其の歩調を一にす。

一 最近十五箇年間の人口（各年末現在）

年	總數	男	女	指數
大正元年	三,三五三,九四三	一,七六三,四八四	一,五九〇,四五九	一〇〇
同二年	三,四一八,二七〇	一,七九四,八〇八	一,六三三,四六二	一〇二
同三年	三,四六八,七一九	一,八一八,〇五六	一,六五〇,六六三	一〇三
同四年	三,四八三,二六六	一,八一四,九四四	一,六六八,三三二	一〇四
同五年	三,五〇〇,一一〇	一,八二四,一五〇	一,六八五,九六〇	一〇五
同六年	三,五〇〇,〇五〇	一,八四六,四四五	一,七二三,六〇五	一〇六
同七年	三,五八三,三九五	一,八五六,一七八	一,七二七,二二七	一〇七
同八年	三,六三〇,三八五	一,八七八,八一〇	一,七五二,五七五	一〇八
同九年	三,六七三,二九〇	一九〇三,七九〇	一,七七〇,五〇〇	一〇〇

年	總數	男	女	指數
同十年	三,七五二,二二七	一九四一,五八二	一,八〇九,六三五	一〇三
同十一年	三,八二二,五八	一九七四,八二四	一,八四六,七二四	一〇四
同十二年	三,八九一,九二二	二,〇〇八,〇九〇	一,八八三,八三二	一〇六
同十三年	三,九五六,七〇六	二,〇三八,一八三	一九一八,五三三	一〇八
同十四年	四,〇六一,五二四	二,〇八七,九一九	一九七三,六〇五	一一二
昭和元年	四,一五五,〇三六	二,一三三,九九八	二,〇二一,〇三八	一一四

本表には蕃地の蕃社に居住する蕃人を除き、平地の蕃社に居住する蕃人は之を算入せり。

二 内地其の他との累年人口指數（各年末現在）

年	臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣
大正元年	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇	一〇〇
同二年	一〇二	一〇四	一〇五	一〇五	一〇四	一〇二
同三年	一〇三	一〇七	一〇六	一〇七	一〇八	一〇三
同四年	一〇四	一一〇	一〇四	一一一	一一〇	一〇四
同五年	一〇五	一一三	一〇七	一一二	一一一	一〇五
同六年	一〇六	一一四	一〇七	一一三	一一〇	一〇七
同七年	一〇七	一一五	一〇九	一一三	一一一	一〇八
同八年	一〇八	一一六	一一〇	一一三	一一二	一〇七

同九年	二〇	二七	二六	一五	一三	一六
同十年	二三	二八	二六	一五	一四	一七
同十一年	二四	二九	二五	一六	一四	一九
同十二年	二六	三三	三三	一六	一五	二〇
同十三年	二八	三三	三二	一七	一六	二一
同十四年	三二	三九	四九	一七	一四	二三
昭和元年	三四	四二	四三	一八	一五	二五

朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。
 内地府縣及北海道の大正九年以後は十月一日現在なり。

一八 蕃 人

臺灣の蕃人は之をタイヤル、サイセツト、ブメン、ツオウ、パイロン、アミ及ヤミの七種族に分つ。昭和元年末現在蕃社數は七百四十、戶數二萬三千二百二十七、人口十三萬八千人なるも、就中五萬千八百九十四人は平地の蕃社に居住するが故に、實際蕃地に居住するもの數は八萬六千七百三十三人なり。
 各種族中人口最も多きはパイロン族にして、總人口の三割を占め、アミ族の二割九分、タイヤル族の二割三分等順次之に亞く。

種族	總數	男	女	百分比
總數	一三八、六三七	六九、三四七	六九、二八〇	一〇〇
タイヤル	三三、七六一	一六、〇九四	一六、六六七	二三六
サイセツト	一一、五五一	六、三八	六、一三	〇九
ブメン	一八、三九四	九、四五〇	八、九四四	一三三
ツオウ	二、〇八九	一、一〇七	九、八二	一五
パイロン	四、八九九	二、〇〇一	二、八九八	三〇二
アミ	四、〇六八	二、〇一〇	二、〇五八	二九三
ヤミ	一、六二五	八四七	七七八	一二

本表中平地の蕃社に居住する蕃人五萬千八百九十四人は本島人として人口統計に計上せらる。

澎湖廳	花蓮廳	臺東廳	高雄州	臺南州	臺中州	新竹州	臺北州	全島
1	1	1	7	0	2	8	9	5
2	4	4	1	1	1	1	1	0
1	1	1	1	1	1	1	1	5
1	1	1	4	8	0	4	5	3
4	1	1	0	5	0	5	3	7
1	8	2	1	1	1	1	1	9

本表は昭和二年十二月末現在なり。

一九 行政區劃

臺灣の地方行政區劃は、幾多の變遷を経たる後、大正九年九月一日に至り、地方官官制に根本的改正を加へ、從來の十二廳を五州二廳に改めたりしも、大正十五年七月一日復た澎湖廳を設置して三廳さなし現に五州は之を五市四十五郡に分ち、郡の下には三十一街、二百二十二庄を置き、三廳は之を十支廳に分ち、支廳の下には三街五庄十九區を置く。

二〇 州及廳の面積

五州三廳中、面積の最大なるは臺中州の四百七十八方里餘にして、高雄、臺南、花蓮港、新竹、臺北、臺東の順序を以て之に亞き、澎湖廳は僅かに八方里餘を以て最小の地位を占む。

今之を内地府縣に比較すれば、臺中州は熊本、宮城の中間に、高雄州は山口、三重の中間に、臺南州は愛媛、千葉の中間に、花蓮港廳、新竹州及臺北州は和歌山、京都の中間に、臺東廳は奈良、鳥取の中間に位し、澎湖廳は面積狭小にして比較すべき府縣なし。

一 州及廳の面積

全	臺北	新竹	臺南	高雄	花蓮	澎湖
島	州	州	州	州	廳	廳
二,三三三・三九	二九六・〇三	二九八・二六	四六七・七一	三五二・五一	三七一・〇三	三三八・六四
百分比例	一二七	一二八	二〇五	一五〇	一五九	一三九
一〇〇・〇						〇・四

二 内地府縣との面積比較

熊	宮	山	高	三	愛	千	和	花	新	京	奈	臺
本	中	口	重	南	葉	蓮	歌	港	山	北	都	東
縣	州	縣	州	縣	州	縣	縣	廳	州	州	府	廳

三六六	四一八	四七二	四七二	三九四	三七〇	三九七	三九七	三五二	三九二	三六八	三〇一	二九八	二九六	二九五	二八五	三六六
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

鳥取縣 三六九四
 順位は一道三府四十三縣及州、廳の面積の順位を示す。

澎湖廳
臺東廳

内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

六二七三
四四〇六

二二 主要都市

臺灣には五市、三十四街あり。就中人口二萬以上の市及街は二十四にして、その第一位を占むるは臺北市の二十萬、之に亞くは臺南市の八萬七千、基隆市の六萬八千、嘉義街の四萬七千、高雄市の四萬六千、臺中市の四萬四千、新竹街の三萬九千等なり。而して東部に於ける廳所在地たる臺東街は僅かに九千、同じく花蓮港街は八千を有するのみなり。

次に州及廳竝に郡役所の所在地たる五市、三街を内地其の他の都市に比較するに、大正十四年十月一日現在に依れば、我が臺北市は大阪、東京、名古屋、京都、神戸、横濱、京城、廣島の八市に亞て實に第九位を占め、長崎市の上に位し、臺南市は平壤、靜岡兩市の中間に、基隆市は松本、福井兩市の中間に、高雄市は秋田、郡山兩市の中間に、臺中市は福島、四日市兩市の中間に、新竹街は沼津、戸畑兩市の中間に位す。而して臺東、花蓮港の兩街は共にその人口樺太の首府豊原よりも少し。

一 主要都市の人口 (昭和元年末現在)

	總數	内地人	本島人	外國人	順位
臺北市(臺北州)	二〇五、六三三	五六、一五四	一三五、八九四	一三、五六五	一
臺南市(臺南州)	八七、九三〇	一三八、四〇〇	七〇、八九三	三、一九七	二
基隆市(臺北州)	六八、六四九	一七、一五六	四七、七九	三、七二四	三
嘉義街(臺南州)	四七、八九四	七、一八九	三九、四七二	一、二三三	四

高雄市(高雄州)	四六,七五四	一一,四八五	三四,二〇三	一,〇六六	五
臺中市(臺中州)	四四,一〇三	一一,三八五	三一,七一四	一,〇〇四	六
新竹街(新竹州)	三九,六八五	四,四三二	三四,八〇四	四四九	七
鹿港街(臺中州)	三三,〇八三	二四七	三三,六八四	一五二	八
大溪街(新竹州)	二七,九七二	四四四	二七,四六九	五九	九
斗六街(臺南州)	二七,九一一	一,〇四九	二六,七二八	一四四	〇
屏東街(高雄州)	二八,三四五	三,五七八	二三,九〇二	八六五	一
清水街(臺中州)	二六,九一三	三二五	二六,五四六	五三	二
麻豆街(臺南州)	二五,六四九	六一四	二四,九七五	六〇	三
員林街(臺中州)	二五,一四四	五八八	二四,三六三	一九三	四
豐原街(同)	二四,七二四	五四六	二四,〇五九	一一九	五
埔里街(同)	二四,三五九	九六六	二三,二〇六	一八七	六
南投街(同)	二三,四五六	八八八	二三,五三一	九九	七
宜蘭街(臺北州)	二三,六一三	二,〇六六	二〇,二八四	二六三	八
淡水街(同)	二三,六〇六	七七〇	二二,四七一	三六五	九
馬公街(澎湖廳)	二二,四五六	二,六二二	一八,七九九	四五	〇
西螺街(臺南州)	二〇,七四七	一六〇	二〇,五〇〇	八七	一
北港街(同)	二〇,六一二	八一四	一九,六四三	一五五	二
桃園街(新竹州)	二〇,二六八	七九八	一九,三八四	八六	三

彰化街(臺中州) 二〇,〇七九 一一,一〇〇 一八,五〇〇 四七九 二四
 臺東街(臺東廳) 九,二四八 一,七六〇 七,〇五七 四三一 二五
 花蓮港街(花蓮港廳) 八,五〇七 三,七七三 四,一三三 五〇一 二六
 本表には人口二萬以上の市及街のみを挙げ、且つ廳所在地たる臺東、花蓮港兩街を掲ぐ。

二 内地其の他の都市との人口比較

(大正十四年) (昭和元年末現在)

廣 臺 長 釜 濱 平 臺 靜 松 基
 島 北 崎 山 松 壤 南 岡 本 隆

人口	一九五,七三二	一八五,〇七一	一〇六,七五九	八九,一四四	八四,八四一	八四,七七三	六三,四三七	六二,二八五
	(一九五,五五五)	(一八五,〇七一)	(一〇六,七五九)	(八九,一四四)	(八四,八四一)	(八四,七七三)	(六三,四三七)	(六二,二八五)
	(二〇五,六一三)	(一八七,九三〇)						(六八,六四九)

福井 川田 仁田 秋田 高松 郡山 福島 臺中 四日市 沼津 新津 戸畑 豐原(樺太) 臺東 花蓮 港東

五九、九四三
 五六、二九五
 四三、八八五
 四三、七五一
 四二、九八四
 四一、三七九
 四一、二一五
 四〇、三九三
 三八、〇四二
 三七、七五五
 三七、七四八
 二一、七八三
 八、八七九
 七、八二七
 (四六、七五四)
 (四一、〇三)
 (三九、六八五)
 (九、二四八)
 (八、五〇七)

朝鮮、樺太は同廳國勢調査速報に依る。
 内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

一三三 農業戸數

臺灣の農業戸數は三十九萬戸にして、總戸數の約五割二分を占め、農業者一戸當平均耕地面積は二町(二甲強)に當る。
 今之を内地其の他と比較するに、總戸數に對する農業戸數の割合最も大なるは、朝鮮の七割六分二厘にして、臺灣は第二位を占め、樺太は僅かに二割三分三厘を以て最下位に在り。
 農業者一戸當平均耕地面積の最も大なるは、北海道の四町五段にして、關東州の三町四段、樺太の二町四段之に亞き、臺灣は第四位を占め、内地府縣は一町歩を以て最下位に在り。

臺 灣 朝 鮮 樺 太 關 東 北 海 道 内 地 府 縣

農業戸數	總戸數百に付農業戸數	農業戸數一戸當耕地面積町
三九五、八一八	五二四	二〇
二七五、四九七	七六二	一七
九、五九一	二二三	二四
五八、七三五	三三六	三四
一七三、五九一	三六八	四五
五三八、五六六	四六七	一〇

本表は昭和元年末の事實なり。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二四 耕地面積

臺灣の耕地は總面積の二割餘を占め、其の面積は七十九萬六千町歩(八十一萬四千甲)にして内、田三十八萬五千町歩(三十九萬三千甲)畑四十一萬一千町歩(四十二萬甲)なり。今之を内地其の他と比較するに、耕地面積の總面積に對する割合の最大なるは、關東州の五割三分七厘にして、臺灣は之に亞き、朝鮮の二割六厘はその第三位を占む。耕地の内、田の割合畑より大なるは内地府縣のみにして、樺太の如きは全然田を有せず。

耕地面積

百分比例

總面積に對する
耕地面積の割合

内地府縣	北海道	關東州	樺太	朝鮮	臺灣	總數
五,二九九,五二八	七,八四二,六九	二,〇一,七五五	二,三三,〇〇三	四,六〇二,四九六	七,九六,六三六	三,八五,二七七
二,九六六,八五五	一,四六六,六二八	一,五九六	—	一,五八五,七〇三	—	四一,一三四九
二,三三三,六七三	六,三七六,四二	二,〇〇,二七九	二,三三,〇〇三	三,〇一六,七九三	—	四八四
—	—	—	—	—	—	三四五
—	—	—	—	—	—	一〇〇〇
—	—	—	—	—	—	六五五
—	—	—	—	—	—	二〇六
—	—	—	—	—	—	二〇六八
—	—	—	—	—	—	二二九六
—	—	—	—	—	—	〇六三
—	—	—	—	—	—	五三七九
—	—	—	—	—	—	八八一
—	—	—	—	—	—	一七八九

本表は昭和元年末の事實なり。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は農林省統計表に依る。

二五 水利

臺灣に於ける埤圳の数は、七千五百六十四にして内、水利組合百二、公共埤圳三、認定外埤圳七千四百五十九なり。又其の灌漑排水面積は三十八萬二千甲にして内、其の五割は水利組合の灌漑に屬す。

埤圳數

灌漑排水面積

灌漑排水面積百分比例

總數	水利組合	公共埤圳	認定外埤圳
七,五六四	一〇三	三	七,四五九
三,八二〇 ^甲 八二	一九三,〇七六	九九,四七九	八九,五二六
一〇〇・〇	五〇・六	二六・〇	二三・四

本表は昭和元年度末現在の事實なり。
 本表の外事業計畫中の組合二あり。

二六 農 産

臺灣の農産物は、昭和元年中の總生産價額二億五千四百萬圓にして内、普通作物一億六千七百萬圓、特用作物六千五百萬圓、園藝作物二千萬圓なり。
 更に之を作物別に觀るに、米は一億四千萬圓を以て第一位を占め、甘蔗は五千百萬圓を以て之に亞き、甘藷の二千百萬圓、蔬菜類の一千萬圓、茶の七百五十萬圓、苧蕉の六百三十九萬圓、落花生の二百七十萬圓、豆類の百六十四萬圓、柑橘の百六十三萬圓等順次之に亞く。

總額	普通作物	米(支米)	甘藷	豆類	小麥	其他	特用作物	甘蔗
二五四、〇四九、三八六	一六七、八四三、七七二	一四四、〇八一、〇〇一	二一、六九八、八九三	一、六四七、六一五	五四、〇四五	三六二、二二七	六五、三八六、九三七	五一、九八九、七六九
100.0	66.1	56.8	8.6	0.6	0.0	0.1	25.7	20.3
甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
19,894,506斤	4,544,999石	1,664,886斤	6,241,733石	1,931,848,733斤	87,755石	2,755石	1,865,180斤	1,528,298斤

茶花	落花生	煙草	黃麻	苧麻	胡麻	藍花	香花	其他	園藝作物	苧蕉	柑橘	龍眼	檳榔	鳳梨	椰子	李棧	蔬菜	其他
七、五四一、七八九	二、七二一、八一九	六〇三、六二六	八三三、七三三	六六四、一五三	二五九、〇七五	一六八、一五五	三九七、二九〇	二二七、五三九	二〇、七二二、一九八	六、三九一、七八二	一、六三〇、七四八	四三〇、九〇六	二二八、一七	七八一、四九八	一七六、〇〇四	一七二、二三二	二〇、七二二、九六八	一九八、九四四
3.0	1.1	0.3	0.3	0.3	0.1	0.1	0.2	0.1	8.2	2.5	0.6	0.2	0.1	0.3	0.1	0.1	0.4	0.2
44,043	27,107	736	2,367	1,757	4,033	1,319	309	?	17,281	2,963	2,233	563	2,299	536	356	?	?	?
19,894,506斤	4,544,999石	1,664,886斤	6,241,733斤	2,218,192斤	9,863石	1,865,180斤	1,528,298斤	?	27,797,701斤	24,097,633斤	7,882,405斤	5,743,670斤	1,605,249箇	5,518,551斤	7,982,045斤	?	?	?

蠶 繭

一〇六、四〇〇

〇

一

?

二七 畜 産

臺灣の畜産物生産總價額は、昭和元年に三千七百萬圓を算し内、家畜生産三千二百三十萬圓、家禽生産五百萬圓、牛乳三十七萬圓なり。
 家畜生産中、豚は二千九百萬圓を以て第一位を占め、水牛の百九十萬圓之に亞く。家禽生産中第一位を占むるは鶏の三百九十萬圓なり。

家畜	總額	生産價額	生産價額 百分比例
水牛	三、八一五、二四三	一〇〇〇	
黄牛	三、三八六、二八一	八五六	
其他の牛	一、九四二、五三五	五一	
豚	六六五、六八二	一八	
其他の羊	一四九、八六一	〇・四	
山豚	二九、四〇一、二九四	七七七	
其他	二〇八、六七四	〇六	
其他	一八、二三五	〇	
家鷄	五、〇五六、六三三	一三四	
家鷄	三、九二三、一〇八	一〇五	
鷄	七九八、五三〇	二・二	

鷹 七面鳥 牛乳

三六、六八六
一八、三〇八
三三、三三〇

一〇〇八

二八 林 産

臺灣の林産物生産總價額は、昭和元年に一千二百八十萬圓を算し内、官行生産價額三百四十萬圓、一般生産價額九百四十萬圓なり。
官行生産價額中第一位を占むるは丸太の二百二十萬圓にして、一般生産價額中にては薪の三百萬圓第一位を占む。

品名	價額	價額百分比
總 官行生産價額	三、四二八、二二八	一〇〇〇
丸 太	二、二六八、一八七	二六六
製 材	一、〇九七、五二八	一七六
副生品及副産物	六二五、三	八五
一般生産價額	九、四六六、六八三	〇五
木 材	一、七〇五、〇八四	七三
竹 材	一、七六五、九三二	一三二
藤 材	二二二、二二五	一三
木 炭	一、五七九、一五七	一七
薪	三、一六五、二六七	三二
竹 炭	七八二、八七三	二四

其 姜 薯 蓮

他 黃 椰 草

七〇、七三八
三〇、六二五
四〇、一九七
一〇四、六九五

〇八
〇三
〇三
〇五

官行生産價額は營林所に於ける賣拂價額にして、昭和元年度の事實を掲上せり。

二九 鑛 産

臺灣の鑛産總價額は、昭和元年に一千六百七十萬圓を算し内、石炭は總産價額の七割九分、即ち一千三百萬圓を以て第一位を占め、金銅鑛及石油は百十萬圓を以て之に亞き、天然揮發油の四十六萬圓、金の四十萬圓等順次之に亞く。

總 産 額	價 額	價額百分比
石 炭	一、七九四、五二噸	一〇〇
金	七九、六六三匁	七九・二
沈 澱 銅	二、三六、七五三斤	二・五
石 油	七六、八三〇石	一・六
金 銅 鑛	一、四、六二八、〇五貫	六・六
硫 黃	五、二六五、九〇一斤	六・七
銀	二、九、五三八匁	〇・四
砂 金	二、五、四三匁	〇・二
天然揮發油	一、七、八二七石	〇・一
總 計	一、六、七三三、二五六	二・八

三〇 水産

臺灣の水産總價額は、昭和元年には一千七百二十萬圓を算し内、水産漁獲物一千萬圓、
 養殖場漁獲物三百三十萬圓、水産製造物二百八十萬圓、製鹽八十四萬圓なり。
 更に之を品目別に觀れば、虱目魚サツバクヒイの二百萬圓第一位を占め、鯉節の百九十萬圓、鯛の百
 八十萬圓、鮪の百六十萬圓、鯉の百四十萬圓等順次之に亞く。

水産漁獲物	價額	價額百分比
總	一七、二六、六六〇	一〇〇.〇
鯛	一〇、二五、六九二	五九.四
鯉節	一、八五、四一七	一〇.五
鯉	一、四六、四七八	八.五
鱈	六二九、七〇二	三.七
鱧	五六三、二六一	三.三
鰻	三四五、四九八	二.〇
鮪	二二七、九四四	一.四
鮭	一、六三、九〇六	九.五
鮪 <small>ツ</small>	一九一、六三三	一.一
黃魚	二〇三、七九六	一.三
花魚 <small>チ</small>		

製 其
鹽 他

一九〇、九七七
八四二、〇五二

四九 一二

鹽	鱈	鰵	蒲	煮	鯉	水	其	鮎	烏	蚶	草	鱈	虱	養	其
魚	鱈	仔	鱈	干	節	產	他	魚	魚	仔	魚	魚	魚	殖	他
			カ			製			ヒ	ヒ	カ	ヒ	ヒ	場	
			ラ			造			ヒ	ヒ	カ	ヒ	ヒ	漁	
			ス			物			ヒ	ヒ	カ	ヒ	獲	物	

二四、五四二	一三九、六六二	八〇、八〇二	一六六、五二一	三〇八、六二二	一九一、五二二	二、八三三、六二八	一〇八、三三二	一二二、六七四	一五一、三八五	四四一、二〇六	二〇九、七五六	二二九、六六七	二、〇五四、三七八	三、三六、二九八	三、一三八、一六八
--------	---------	--------	---------	---------	---------	-----------	---------	---------	---------	---------	---------	---------	-----------	----------	-----------

〇・一	〇・八	〇・五	一・〇	一・八	二・二	一六四	〇・六	〇・七	〇・九	二・六	一・二	一・四	二・九	一九三	一八二
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

三一 工業

臺灣の工業總生産價額は、昭和元年に二億三千六百萬圓を算し内、砂糖の一億五千五百萬圓は群を抜いてその第一位を占め、再製茶の一千二百萬圓、酒精の五百萬圓、帽子の四百萬圓、木製品の三百九十萬圓、セメントの三百五十萬圓等順次之に亞く。

生産價額	生産價額 百分比例
總額	100.0
砂糖	65.8
酒精(稅拔)	2.2
再製茶	5.4
原動機及其他 屬機械類其他	1.0
木製品	1.7
セメント	1.5
染色類	0.6
麵類	1.2
煉瓦(耐火) 化粧(共)	0.7
調合肥料	1.3

金銀細工	1,991,917	0.8
味噌及醬油	2,282,035	1.0
植物性油	2,956,339	1.3
及同油糟		
敷瓦及屋根瓦	1,090,119	0.5
金銀紙	1,495,092	0.6
製粉	2,588,814	1.1
綿布、麻布類	1,693,904	0.7
糖蜜(稅拔)	2,864,348	1.2
帽子	4,065,085	1.7
靴	1,209,931	0.5
製氷	1,018,077	0.4
竹細工	1,411,633	0.6
鳳梨罐	1,668,963	0.7
其他	1,776,117	0.75



三三三 糖 業

臺灣の糖業は昭和二年期に於て、公稱資本金二億九千九百萬圓、作業工場數百六十九、作業能力四萬一千米噸を有し、其の製糖高六億八千五百萬斤に達す。就中新式製糖會社の數は十三にして作業工場數四十五、作業能力三萬九千米噸を有し、その製糖高六億七千百萬斤を算す。

總數	公稱資本金	工場數	作業能力	製糖高	製糖高百分比
新式製糖會社	29,917,600 <small>千円</small>	169	41,284 <small>米噸</small>	685,234,019 <small>斤</small>	100.0
臺灣製糖	29,050,000	45	39,434	671,018,437	97.9
新興製糖	63,000	10	9,078	180,159,953	26.3
明治製糖	1,100,000	1	560	871,850	1.3
大日本製糖	37,500	5	5,370	867,050,100	12.7
東洋製糖	27,250	2	3,584	61,301,800	8.9
鹽水港製糖	36,250	6	5,454	81,822,550	11.9
新高製糖	58,500	7	5,880	87,376,000	12.8
帝國製糖	28,000	3	3,284	53,047,950	7.7
臺南製糖	18,000	5	3,234	88,378,850	12.9
總計	90,000	253	11,310	1,130,317,400	16.6

製糖會社	公稱資本金	工場數	作業能力	製糖高	製糖高百分比
臺東製糖	17,500	1	392	4,654,100	0.7
新竹製糖	7,500	1	560	2,437,150	0.4
沙轆製糖	25,000	1	336	4,017,500	0.6
恒春製糖	60,000	1	392	1,156,800	0.2
改良糖廠	86,600	9	600	5,571,867	0.8
舊式糖廠	?	25	1,150	8,643,715	1.3

昭和二年期は、大正十五年十一月より昭和二年十月に至る期間を云ふ。

三三 貿易

臺灣の貿易は之を外國貿易及内地貿易(臺灣内地間貿易)の二種に分つべきも、今之を總括すれば明治三十年の三千一百萬圓より大正元年の一億二千五百萬圓に進みたり。然るに大正二、三の兩年は砂糖の減産と一般商況の不振に依り少しく減退したるも、大正五年には世界大戰の影響を受けて、一億七千七百萬圓に達し、大正六年には二億圓臺に上り、大正八年には更に三億圓臺を突破せり。然るに大正十年及同十一年には世界經濟界の不況に伴ひ再び二億七、八千萬圓に減退したりしも、大正十二年には復た三億圓臺に上り、昭和元年には四億三千萬圓に達し、人口一人當百四圓を算せり。

次に貿易總額に對する内外兩貿易の割合を觀るに、内地貿易は常に過半數を占め少きも七割、多きは七割八分に達す。

一 貿易總表

年	總額		指數		外國貿易		内地貿易		百分比例	
	千円	千円			千円	千円	外國貿易	内地貿易	貿易	貿易
大正元年	二五,四二四	一〇〇	三四,二六七	九一,一五七	二七,三	二七,三	七二,七	三七,四	平均	一人當
同二年	二四,四四八	九二	三〇,九六六	八三,二八二	二七一	二七一	七二,九	三七,四		
同三年	二一,六三三	八九	二五,九九六	八五,六三七	二二三	二二三	七二,七	三七,四		

年	總額	指數	外國貿易	内地貿易	百分比例
同四年	一九,〇三三	一〇三	二八,三二二	一〇〇,八二一	二一九
同五年	一七,七三〇	一四一	四七,〇八三	一三〇,二八七	二六,五
同六年	二四,六六一	一八七	六一,三二五	一七三,三七六	二六,一
同七年	二四,五七六	一九四	六六,九九九	一七六,六二七	二七,五
同八年	三三,五三六	二六五	九九,七五五	二二二,七八一	三〇,〇
同九年	三八,七〇二	三三〇	九五,五四〇	二九三,一六二	二四,六
同十年	二八,三九三	二二八	六三,九七五	二二二,四一八	二二,三
同十一年	二七,九六〇	二二一	六七,四八五	二〇九,四七五	二四,四
同十二年	三〇,八七二	二四六	六八,二六四	二四〇,四六〇	二二,一
同十三年	三八,七〇〇	三〇八	八九,〇〇〇	二九七,七〇〇	二二,〇
同十四年	四四,九六〇	三五八	一〇四,四五五	三四五,一五五	二二,三
昭和元年	四四,八三八	三四七	一一一,三三三	三三三,五二五	二二,六

年	總額	指數	輸出	輸入	輸入超過
大正元年	三四,二六七	一〇〇	一四,九六〇	一九,三〇七	四,三四七
同二年	三〇,九六六	九〇	一二,九四二	一八,〇三四	五,〇八一
同三年	二五,九九六	七六	一二,九八二	一三,〇二四	三三
同四年	二八,三二二	八三	一五,四三〇	一三,七八二	(1) 二,六四九

昭和十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同五年
三三五、一五五	三四五、一五五	二九七、七〇〇	二四〇、四六〇	二〇九、四七五	二二二、四一八	二九三、一六二	二二二、七八一	一七六、六二七	一三〇、二八七
三三五	三七九	三三七	二六四	二三〇	二四四	三三二	二五五	一九四	一四三
二〇二、一一〇	二二五、二四九	二二一、〇九八	一六九、四四二	一二七、三〇一	二二八、八九七	一八一、〇九二	一四二、二〇八	一〇五、九六二	八〇、六九五
二二一、四〇五	二二九、九〇六	八六、六〇三	七一、〇一八	八二、一七三	九三、五二一	一一二、〇七〇	九〇、五七二	七〇、六六五	四九、五九二
八〇、七〇五	八五、三三三	一二四、四九六	九八、四二四	四五、二二八	三五、三七六	六九、〇二一	五一、六三六	三五、二九七	三一、一〇四

(1) は移入超過なり。

昭和十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同九年	同八年	同七年	同六年	同五年
一一一、三三三	一〇四、四五五	八九、〇〇〇	六八、二六四	六七、四八五	六三、九七五	九五、五四〇	九九、七五五	六六、九四九	四七、〇八三
三三五	三〇五	二六〇	一九九	一九七	一八七	二七九	二九一	一九五	一三七
四九三、一五五	四七、九六六	四二、五七六	二九、一五二	三〇、五六三	二二、五四二	三五、一七三	三五、六二二	三三、三九四	三一、六五二
六三、〇〇八	五六、四八九	四六、四二四	三九、一一一	三六、九二二	四〇、四三三	六〇、三六七	六四、一三三	三三、五五五	一五、四三〇
一一、六九二	八、五三三	三、八四八	九、九五九	六、三五八	一六、八九二	二五、一九四	二八、五一〇	一九、二一六	(1) 一六、三三三

(1) は輸出超過なり。

三 内地貿易

大正元年	同二年	同三年	同四年
九一、一五七	八三、二八二	八五、六三七	一〇〇、八二二
一〇〇	九一	九四	一一一
四七、八三一	四〇、四四七	四五、七三八	六〇、一九三
四三、三五五	四二、八三六	三九、八九九	四〇、六二八
四、五〇六	二、三八九	五、八四〇	一九、五六五

(1) 移出超過

三四 對手國別外國貿易

臺灣の外國貿易は大體に於て輸入超過を示す。而して對手國中支那は累年主要の地位に在り。即ち輸出貿易總額に對する其の割合は少きも二割八分五厘多きは六割を占め、輸入貿易に於ては少きも三割四分、多きは五割七分を占む。

今昭和元年の外國貿易に就て觀るに、貿易總額一億一千萬圓内、輸出額は四千九百萬圓にして、就中支那の二千九百萬圓最も多く、總額の六割に當り、北米合衆國の六百萬圓、香港の四百四十萬圓、蘭領印度の四百萬圓等順次之に亞く。輸入額六千二百萬圓中第一位を占むるは支那の二千七百萬圓にして、總額の四割三分に當り、英領印度の一千萬圓、獨逸の五百五十萬圓、蘭領印度の四百萬圓、英吉利の二百七十萬圓等順次之に亞く。

一 輸 出

總額	關東州	支那	香港	蘭領印度	暹羅
昭和元年	四九,三二五	一,二六二	二九,七六〇	四,四三八	四,〇三二
大正十四年	四七,九六六	一,一八八	二六,三四七	五,〇四四	四,〇〇五
同十三年	四二,五七六	八六一	二二,一五四	五,七六六	三,五四〇
同十二年	二九,二五三	七二二	一〇,五三六	四,一七二	三,一八九
同十一年	三〇,五六三	六二二	一〇,三〇〇	四,三三三	三,二九四
同十年	二二,五四二	二五八	九,一七六	四,五六九	三,〇六五
同元年	一四,九六〇	三三	四,二六四	三,九三三	三三

二 輸 入

英領印度 海峽植民地 及 暹羅 比律賓 諸島	佛蘭西	獨逸	英吉利	北米合衆國	其他
昭和元年	五七九	三三五	二三四	一三三	九六六
大正十四年	五三三	四六三	六五九	一三三	一,一〇二
同十三年	三二二	六〇一	八〇九	二三四	一,一六八
同十二年	一八四	三九四	一,〇四九	二四	八四一
同十一年	二二〇	四三一	三三二	一八五	一,〇三三
同十年	三五六	四四五	二二二	六	二〇五
同元年	三四五	五二	六八二	一,五七三	一,〇八七

總額	關東州	支那	佛領印度支那	蘭領印度	暹羅	英領印度	海峽植民地及	英領ボルネオ
昭和元年	六二,〇〇八	二,〇三三	二七,二二七	六八九	四,一一〇	一,七二六	一〇,五七三	四二九
大正十四年	五六,四八九	二,一〇五	三〇,五七二	二二九	三,四四八	七二七	三,八五三	二三八
同十三年	四六,四二四	一,〇六三	二六,三三七	一四八	三,〇三三	四六五	二七〇六	二六八
同十二年	三九,一一二	三,七〇八	一七,四九八	一三四	四,〇三三	三〇四	一,四九六	一四四
同十一年	三六,九三三	三,〇六三	一八,二三九	二〇一	三,五〇一	二四五	一,二三七	九三
同十年	四〇,四三三	一,七六五	一九,四六五	五四五	六,五八八	三七一	一,六四九	一二七
同元年	一九,三〇七	一,二五八	六,七六七	三三九	三〇七	一〇三	二,一七三	五六

濠太刺利	八〇五	五〇六	一二七五	六二二	一八五	八八	六三
波 斯	六八七	二二四	一三三六	三九二	五六六	九三八	一四三五
獨 逸	五,五九六	一,七三三	六七四	五三三	三一	一六	一〇七二
英 吉 利	二,七〇五	五,三七三	二,八八五	一九五八	一,四六五	一九八九	三,四九〇
北米合衆國	二,一〇三	二,二八八	三,五〇五	六,三七二	三,三〇一	四,九六九	一,七〇〇
英領アメリカ	七九四	六九七	六七一	二九六	五三三	一五四	一
其 他	二,五四三	二,五七八	二,二五九	一,六四四	四,三七二	一,七六九	五五四

三五 支那、香港及南洋貿易

臺灣の外國貿易中、臺灣と最も密接の關係を有する支那、香港及南洋との貿易を再檢するに、年に依り多少の相異あるも、大體に於て常に重要な地位を占む。即ち昭和元年に就て觀るに、輸出額は四千萬圓にして、輸出貿易總額の約八割一分を占め、輸入貿易は四千五百萬圓にして、輸入貿易總額の七割三分に當れり。

一 輸 出

總 額	昭和元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同元年
支 那	四〇,二八一	三七,六〇八	三三,八六一	一九,七六一	一九,六九七	一八,七五九	五,二四八
香 港	二九,七六〇	二六,三四七	二二,一五四	一〇,五二六	一〇,三〇〇	九,一七八	四,二六四
南 洋	四,四五六	五,〇四四	五,七六六	四,一七二	四,三三三	四,五六九	三九三
總 額	六,〇六三	六,二二七	五,九四二	五,〇六三	五,〇七四	五,〇二二	四九一

本表の南洋とは英領海峽植民地、英領ボルネオ、蘭領印度、比律賓、英領印度、佛領印度支那、暹羅及濠太刺利を謂ふ。以下同し。

二 輸 入

總 額	昭和元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同元年
支 那	四五,五九五	三九,六九五	三四,二〇六	二四,四〇三	二三,八四八	二九,一四七	九九四三
香 港	二七,二二七	三〇,五七二	二六,三二七	一七,四九八	一八,二二九	一九,四六五	六,七六七
南 洋	二,七〇五	二,二八八	三,五〇五	六,三七二	三,三〇一	四,九六九	一,七〇〇
總 額	七九四	六九七	六七一	二九六	五三三	一五四	一

支那、香港、南洋貿易總額
に對する百分
比例

昭 和 元 年	同 十 四 年		同 十 三 年		同 十 二 年		同 十 一 年		大 正 十 年	
	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出
一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇	一〇〇〇
五九七	七三八	七七〇	七〇一	七七〇	六五四	七一七	五三三	七六五	五三三	六八八
〇一	一一一	〇三	一三四	〇二	一七〇	〇四	二二一	〇三	二一九	〇四
四〇二	一五一	三三七	一六五	三三八	一七六	二七九	二五六	二二三	二五八	三三八
										二六七

外國貿易總額
に對する割合

昭 和 元 年	同 十 四 年		同 十 三 年		同 十 二 年		同 十 一 年		大 正 十 年	
	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出	輸 入	輸 出
七五五	八一七	七〇三	七八四	七七七	七九五	六二四	六七八	六四六	六四四	七三二
四三八	六〇四	五四一	五四九	五六七	五二〇	四四八	三六一	四九四	三三七	四八二
〇一	九〇	〇二	一〇五	〇二	一三五	〇二	一四三	〇二	一四一	〇三
二九六	二二三	一六〇	一三〇	一六八	一四〇	一七四	一七四	一五〇	一六六	三三七
										二二三

南洋 一八三二 二〇七
 三比 九〇六 七二
 例 七八〇七 六八七 五三八 九五六 三〇五六
 總額 七九七 支那 八九 七二 二四 二九
 香港 一九四 南洋 三三七

三六 重要品別外國貿易

臺灣の外國貿易中輸出品の主要なるものは、茶、石炭、砂糖、樟腦、酒精等なり。今昭和元年に就て之を觀るに、茶は一千二百三十萬圓を以て第一位を占め、石炭の八百四十萬圓、砂糖の三百萬圓、酒精の二百萬圓、樟腦の百九十萬圓等順次之に亞く。

次に輸入品の主要なるものは、豆油糟、砂糖、米、木材及板、硫酸アンモニウム、ガンニ―囊、石油、豆類等にして、昭和元年には豆油糟の千三百萬圓第一位を占め、米の九百萬圓、硫酸アンモニウムの六百八十萬圓、砂糖の五百三十萬圓、豆類の三百六十萬圓、木材及板並ガンニ―囊の各二百四十萬圓、石油の百十萬圓、小麥の百萬圓等順次之に亞く。

一 輸 出

品名	昭和元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同元年
茶	1,335	1,147	1,054	1,008	955	795	667
砂糖	3,276	5,903	6,014	2,400	2,831	2,325	1,729
石炭	8,437	7,448	7,305	5,695	5,719	6,582	1,218
樟腦	1,949	3,609	2,637	3,305	4,418	280	4,500
燐寸	177	518	518	137	268	545	118

品名	昭和元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同元年
綿織物	5,184	3,764	1,486	454	1,267	1,303	99
乾魚及鹹魚	3,361	1,943	2,852	565	596	917	157
セメソ	1,689	1,239	798	652	1,107	195	379
苧麻	499	497	452	365	406	435	379
酒	2,001	1,987	1,621	1,300	652	571	24
錫	1,928	2,466	1,589	533	54	63	45

二 輸 入

品名	昭和元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同元年
豆油	1,374	1,678	2,684	7,657	7,833	6,254	1,917
砂糖	5,304	4,585	3,838	4,445	6,099	5,377	1,488
阿片	987	2,817	1,369	1,521	1,669	1,505	3,094
米	9,275	1,537	614	266	450	1,331	1,154
木材及板	2,420	1,815	2,699	2,352	2,146	2,248	705
石油	1,107	1,308	1,434	1,359	1,374	1,947	756
包草	898	1,234	1,516	1,880	1,659	575	497
煙草	776	855	988	427	901	857	907
紙類	3,658	3,770	3,218	2,578	2,908	1,493	339
豆	729	738	850	773	863	1,276	594

小麥	1,005	988	1,447	968	329	129
硫酸アンモ ニウム(粗製)	6,804	5,457	1,825	919	339	349
ガンニ-イ(故共)	2,486	2,795	1,764	199	339	335
						100

三七 重要品別内地貿易

臺灣の内地貿易中移出品の主要なるものは、砂糖、米、芭蕉實、樟腦及樟腦油、木材及板材、酒精、石炭、鑿節、模造パナマ帽等なり。今昭和元年に就て之を觀るに、砂糖は九千八百萬圓を以て第一位を占め、米の六千三百萬圓、芭蕉實の一千萬圓、樟腦及樟腦油の四百六十萬圓、酒精の四百萬圓、木材及板材の三百萬圓、鳳梨罐詰及模造パナマ帽の各百七十萬圓、石炭の百四十萬圓等順次之に亞く。

次に移入品の主要なるものは、綿織及絹織布、鹹魚及乾魚、肥料、鐵、酒類、木材及板材、紙、小麥粉等にして、昭和元年には綿織及絹織布の一千九百萬圓を以て第一位を占め、鐵の六百二十萬圓、鹹魚及乾魚の六百萬圓、木材及板材の四百七十萬圓、肥料の四百萬圓、酒類の三百九十萬圓、小麥粉の三百四十萬圓、紙の三百萬圓等順次之に亞く。

一 移出

	昭和元年	大正十四年	同十三年	同十二年	同十一年	同十年	同元年
砂糖	9,836	10,565	12,921	12,808	8,449	8,709	28,134
米	6,309	7,310	4,846	2,363	1,358	1,924	10,257
酒精	4,081	3,855	3,040	3,005	1,787	5,801	1,579
樟腦及樟腦油	4,658	3,383	5,996	5,224	4,080	3,494	2,570
芭蕉實	10,900	9,096	11,826	8,280	6,876	4,156	337
切乾薯	660	1,921	1,368	332	358	1	36

模造パナマ帽	一七九八	一三九七	九二〇	四七三	九六三	五四二	—
セメン	二七三	二〇四	一九八四	一〇二七	七三六	八一	—
食鹽	九〇四	一二四〇	一六六九	一〇〇七	九五〇	三六六	二七
木材及板材	三〇五六	二八〇一	二〇六九	三三三七	一七五三	五八六	六七
鯨節	一八二八	一三三三	一八九〇	一八四二	一八四五	一、二〇八	二九
石炭	一四七三	一九〇一	二〇六五	一八四二	一七九〇	五七九	—
鳳梨罐詰	一七五二	一九一八	一三五五	九二五	八六〇	八六五	三二

一一移入

昭和元年	千円	同十三年	千円	同十二年	千円	同十一年	千円	同十年	千円	同元年	千円
綿織及絹織布	一九八〇六	一五七〇八	七九一六	六四七三	六四二二	七三七七	五〇一六	—	—	—	—
鹹魚及乾魚	六〇五六	五九〇六	六四六九	四三三五	四一八二	四九二一	三〇五四	—	—	—	—
鐵	六二二四	六一一九	四八九七	四〇六五	四二六二	六〇三一	一八八〇	—	—	—	—
木材及板材	四七五六	三五二七	一三七一	一八四二	二八九五	四四〇〇	三、四七一	—	—	—	—
清酒	一六五七	一九九九	一九四四	一七〇八	三、七六八	三、六八三	一、三五四	—	—	—	—
麥酒	二、三二一	一、八七二	一、五六一	一、六四三	一、四七七	一、九九九	四六八	—	—	—	—
錫	二七六五	三、五七四	一九〇九	一、四九二	六三八	八二三	五八〇	—	—	—	—
過燐酸肥料	一、六四九	一、八〇七	一、三八七	七八〇	七六五	七三七	—	—	—	—	—
硫酸アンモニウム	一、五二三	二、八九一	二、八五四	一、六九八	一、二〇三	八三	—	—	—	—	—

調合肥料	一〇一五	一六〇八	二、三八九	一、四四九	二、三六〇	二、四四〇	—
ガンニ一糞及寸	一八〇七	二、七六四	一、六三七	五六一	二、三六	四六〇	二、二五
黃麻	一〇九五	一、五六六	一、三四六	一、〇五五	一、二三八	一、五七八	四八二
紙	三〇六六	三、四三三	二、三八八	二、二七一	二、二五七	二、三六四	八三八
米	九七四	一六、八九二	二、四〇九	一九七八	五、七二二	一、六八〇	一、〇一八
鐵製	二、六二〇	二、二七四	一、五三九	一、二〇七	一、二〇〇	一、一〇一	五〇七
煙草	二、二六七	一九〇二	一、八〇七	一、五二六	一、七二五	二、二一九	六六三
小麥粉	三、四四〇	三、九三六	二、四八四	一、五五五	二、二一九	一、五二八	一、六九〇
各種罐詰食物	一九二五	一、三九九	九七五	七、七四	七、四六	九、九三	四、六七
石油	七六六	一、一七二	五、四八	四、七五	五、四四	五、一五	二、三六
綿絲	一、六四二	一、六七〇	八八二	八三六	七、五九	五、一一	一、六六
毛織物	一、三四四	一、〇一九	六、七九	五、二四	四、三三	三、九二	三、四七
メリヤス肌衣(各種)	一、五〇九	一、六六五	八、四〇	七、八八	五、二二	六、五五	一、九四
砂糖	一、一九〇	九、九〇	一、三三七	八〇八	六、六三	一、〇〇五	一、二六

三八 港別貿易

昭和元年に於ける臺灣の輸移出入貿易總額四億三千萬圓を港別に觀れば、基隆の二億五千萬圓第一位を占め、總額の五割八分に當り、高雄の一億六千萬圓之に亞て三割七分を占め、安平の一千三百萬圓、淡水の三百七十萬圓を始め殘餘の諸港は之を合算するも尙僅かに總額の五分を占むるに過ぎず。

今之を内地其の他の諸港と比較するに、基隆は神戸、横濱、大阪、大連に亞て第五位を占めて大連と釜山の中間に、高雄は第七位を占めて釜山と名古屋との中間に在り。更に安平は武豊と函館との中間に、淡水は三角と糸崎との中間に位ぬす。

神戶	横濱	大阪	大連	釜山	高雄	名古屋	神門
總額	輸	出	輸	入			
一七三、一〇〇	六八〇、六八二	一、〇五二、四一八	一、四〇〇、〇〇〇	六三九、六四〇	二八〇、九九一	三三〇、〇二八	一三〇、三三八
六九九、二四〇	七六〇、三六〇	四八二、二四九	五三〇、五四三	三二〇、五一五	一三六、九九七	一二四、七三一	一三三、三三〇
二五四、一九	一三六、九九七	一二四、七三一	二九九、九三三	一一〇、九七六	五二八、四三	三三、六五三	一六〇、一九三
二六〇、一九三	一一〇、九七六	五二八、四三	一三三、三三〇	三三、六五三	一三〇、三三八		
一三三、三三〇	三三、六五三						
一三〇、三三八							

仁武安國三淡糸

川豐平館角水崎

二七、八八七	五九、八四四	六八、〇四三
一四、二四八	一	一四、二四八
一三、三一九	八〇二	一二、五一七
一一、五二八	六、八二二	四、七〇七
三、八七一	一六	三、八五五
三、七九	七五	三、〇五三
三、六三一	一三五	三、四九六

臺灣及朝鮮の輸出中には移出を、輸入中には移入を含む。
 朝鮮、關東州は同應統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

三九 財政

臺灣總督府特別會計が全く國庫の補助を受けずして、獨立の實を擧ぐるに至りしは、明治三十八年度なりき。而して同年度の歳入は僅かに二千五百萬圓に過ぎざりしか、爾來年々共に其の額を増大し、大正八年度には一億圓を突破し、大正九年度には一億一千九百萬圓に増額したりしか、大正十年度よりは少しく減退を示したり。然るに昭和元年度には一億三千萬圓に増額し最近の記録を作りたり。

次に歳入中其の主要部分を占むるは、官業及官有財産收入にして、其の歳入總額に對する割合は、年に依り多少の高低あるも、少きは三割九分、多きは六割五分を占む。

歳出は明治三十八年度の二千萬圓より、大正八年度の七千二百萬圓に増加し、更に大正十一年度には九千六百萬圓に増額せり。然るに大正十二年度以降は八千萬圓臺に減退したりしも昭和元年度には再び九千萬圓臺に増額せり。

年 度	歳入			歳入百分比例			歳出 指數		
	總額 千円	租 稅 千円	其他 千円	租 稅 收官業及 官有財産 千円	其他 千円	租 稅 收官業及 官有財産 千円	其他 千円	租 稅 收官業及 官有財産 千円	其他 千円
明治三十八年度	二五,四二四	七,三八五	一三,九二九	一〇〇	二九・一	五四・八	一六・一	二〇,四四三	一〇〇
大正元年度	六〇,三九六	一三,四九四	二四,七三〇	二二・七	三三・四	四一・〇	三六・六	四七,一八九	二三・一
同 六年度	六五,四二五	九,九六九	三六,九五七	三〇・一	一五・二	五六・五	二八・三	四六,一六七	二三・六
同 七年度	八〇,五〇一	一一,三四六	三九,六八八	三三・七	一四・一	四九・三	三六・六	五五,三三五	二七・一

年 度	總額	租 稅	其他	租 稅	其他	租 稅	其他
八 年 度	一〇〇,一六六	一五,三三〇	四五,六二九	三九,三〇七	一五・二	四五・六	三九・二
同 九 年 度	一一九,一四八	二四,三〇三	五一,八四六	四三,〇〇〇	二〇・四	四三・五	三六・一
同 十 年 度	一二二,〇三六	二二,三三九	四三,九六五	四六,八三一	一九・〇	三九・二	四一・八
同 十 一 年 度	一二三,四二一	一九,〇一七	五九,六五七	三四,七四九	一六・八	五三・六	三〇・六
同 十 二 年 度	一一〇,〇九八	一七,六七三	六五,一一〇	二八,三〇五	一五・九	五八・六	二五・五
同 十 三 年 度	一二三,六一五	一七,五九七	六四,二七九	三二,七三九	一五・五	五六・六	二七・九
同 十 四 年 度	一二九,五六〇	一八,三八四	六九,六三六	三一,五四〇	一五・四	五八・二	二六・四
同 昭 和 元 年 度	一二三,七七八	二二,九二二	七〇,六四五	三九,二二三	一六・六	五三・六	二九・八
同 昭 和 二 年 度	一二二,五九九	一六,八四七	七三,五三三	三三,三三〇	一五・二	六五・〇	一九・九

本表中大正十三年度迄は決算、大正十四年度及昭和元年度は現計、昭和二年度は豫算なり。

四〇 專 賣

臺灣の專賣は現在、阿片、食鹽、樟腦、煙草及酒の五種なるが、就中酒は大正十一年七月以降の實施さす。今最近十五年間に於ける賣渡價額を觀るに、大正元年度に千七百萬圓なりしものか、大正六年度には二千萬圓を越ゆるに至り、更に大正九年度には三千萬圓を突破したるも、翌大正十年度には經濟界の世界的不況に伴ひ、樟腦の如きは特に前年度の一千萬圓より五百萬圓に減退したる爲め、總額も二千五百萬圓に低下したりしか、大正十一年度には稍や景況を回復したるを、酒專賣實施の結果總額三千四百萬圓に達し、大正十二年度には四千萬圓を突破し、大正十四年度には四千五百萬圓に増加せり。

最近人造樟腦の需用旺盛となり是か對策上樟腦に關する事項は一般に公表せざる事となりたる爲め、昭和元年度の賣渡總價額には樟腦に關するものを除きて掲上せり。

年度	賣渡總價額	阿片烟膏	食鹽
大正元年度	一七、〇九六、九二一	六、〇二七、八三八	七四七、九三二
同 二年度	一六、四九七、五〇〇	五、八八六、四〇〇	八〇八、九二二
同 三年度	一六、三六一、八三三	五、六八三、八六四	八九六、四六九
同 四年度	一六、五一一、七三四	五、八〇〇、七二四	八七三、九七八
同 五年度	一九、五九七、九二一	六、五九〇、一五三	九五二、九三五
同 六年度	二一、〇三五、七〇二	六、九二四、三七七	一、一八〇、四六五
同 七年度	二二、六六二、三四五	七、五五二、三四五	一、〇九三、二〇五

年度	樟腦及樟腦油	煙草	酒	指數
同 八年度	二七、四三三、三六一	七、六一九、四二二		九七九、〇八五
同 九年度	三二、九七三、八三五	七、七〇八、二三五		九九七、七七八
同 十年度	二五、四四二、〇〇六	六、七七二、六一四		一、七五三、六七七
同 十一年度	三四、六五三、五六二	六、二八三、二七七		一、八一〇、三〇七
同 十二年度	四〇、三二七、一五五	五、六四〇、六六五		二、三八二、八三三
同 十三年度	四一、八一七、九七八	五、一八四、〇三六		二、八三八、二八一
同 十四年度	四五、二五六、五六七	四、九二一、六六八		二、四六五、六四九
昭和元年度	三四、九〇九、四四七	四、七二六、五七六		二、二七二、八七六
大正元年度	五、七九七、三〇七	四、五二三、八三四		一〇〇
同 二年度	五、〇八三、〇七九	四、七一九、一〇九		九六
同 三年度	五、三三二、〇五七	四、五四九、四三二		九六
同 四年度	五、一六八、七六三	四、六六八、二六九		九七
同 五年度	六、七三八、五八四	五、三六二、二四九		一、一五
同 六年度	七、二一九、五二七	五、八一三、三四三		一、二五
同 七年度	七、〇四〇、九九七	六、九七五、八九八		一、三三
同 八年度	九、一五三、三二〇	九、七〇九、五五四		一、六〇
同 九年度	一一、八四〇、二九〇	一二、四二七、五三二		一九三
同 十年度	五、二五六、七二六	一一、六五八、九九九		一四九

同十一年度	九,二七二,九九七	一〇,七四六,二八九	六,五四〇,六九二	二〇三
同十二年度	一三,三二四,九八五	一〇,七五五,一四四	八,一三三,五二九	二三五
同十三年度	一一,〇七九,八七二	一一,〇三一,五七〇	一一,六七八,〇三九	二四五
同十四年度	一二,〇七六,四二七	一二,四五六,一五四	一三,三三四,六六九	二六五
昭和元年度	?	一四,〇〇四,五三六	一四,〇一五,四五九	二〇四

樟腦及腦樟油には副産物を含む。

四一銀行

臺灣に於ける銀行は、昭和元年十二月末現在に依れば行數七（内、日本勸業銀行及三十四銀行は支店）にして、島内に於ける支店及出張所數合計四十六、資本金九千九百萬圓、（拂込金八千五百萬圓）、準備金二百二十萬圓、純益金六百萬圓、預金一億二百萬圓、貸出金二億五千萬圓なり。

總數	支島 出張所 店內	公稱 資本金 千円	準備金 千円	純益金 千円	年末現在	
					島内預金 千円	島内貸出金 千円
臺灣銀行	四	九,九四八	二,二二一	六,〇三四	一〇,一六六	二五〇,五六二
日本勸業銀行	一	三,〇一八	一,七六六	二,四三四	三六,二八二	一四〇,七八九
臺北支店	—	—	—	—	一,六一九	四六,四三二
華南銀行	—	五,〇〇〇	—	—	—	—
臺灣商工銀行	五	一〇,〇〇〇	三,二五	一,九一	二,二六五	二,三四七
彰化銀行	三	四,八〇〇	八三	二,八九	二,八二七	二,八六六
臺灣貯蓄銀行	—	一,〇〇〇	—	—	—	—
三十四銀行	三	六〇〇	—	—	—	—
臺灣支店	—	—	—	—	—	—

日本勸業銀行支店及三十四銀行支店の資本金は本島各支店に於ける元金を掲ぐ、但し勸業銀行支店元金は毎月末本店勘定の平均額なり。

四二物價

臺灣の物價は世界大戰の影響を受くること比較的少かりしも、戦局の進展に伴ひ、大正七年頃より著しき昂騰を示し、大正九年にはその絶頂に達したりしか、翌大正十年以降は稍や低落の趨勢に在りたるも、最近に至り少しく高率を示せり。即ち主要なる日常生活必需品の臺北市に於ける物價の最近十五箇年の指數はよくその趨勢を示せり。

同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	大正
十	十	九	八	七	六	五	四	三	二	元	年
年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
二七	二三	二六	一七	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	米
二四	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	二七	二八	二九	甘藷(白)
二六	二九	一八	一九	二〇	二一	二二	二三	二四	二五	二六	米(太)
四七	五七	五〇	四六	三五	三四	三三	三二	三一	三〇	二九	醬油(内地)
二八	三三	二六	二四	二三	二二	二一	二〇	一九	一八	一七	牛肉(牛黃)
二五	二六	二八	二八	二九	三〇	三一	三二	三三	三四	三五	豚肉
二七	三四	三三	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	二〇	木炭
二〇	三五	三三	二八	二七	二六	二五	二四	二三	二二	二一	薪

同十二年	二〇	一〇	一三	四六	二〇	一六	二七	二七
同十三年	一〇	九	一〇	四七	二〇	一五	二七	二八
同十四年	一三	一五	一七	四〇	二〇	一六	二九	二八
昭和元年	一〇	一六	一五	四三	二二	一六	二九	二五

四三 教育

臺灣の教育は、大正十一年二月發布の臺灣教育令に依り、從來の方針を一變し、初等教育を除くの外は、悉く内臺人共學の制を採るに至れり。而して初等教育機關たる小學校及公學校の八百六十五校、兒童二十四萬一千人、高等普通教育機關たる高等學校、中學校及高等女學校の二十一校、生徒八千五百人、師範學校は三校、生徒千五百人、實業教育機關たる實業補習學校、農林學校、工業學校、商業學校の二十九校、生徒二千六百人、專門教育機關たる醫學專門學校、高等農林學校、高等商業學校、商業專門學校の五校、生徒七百人、私立各種學校十七校、生徒二千四百人、書房百三十六、生徒五千五百人あり。

次に初等教育機關を内地其他と比較するに、人口千に對する小學校兒童數は、樺太の百六十三人七分最も多く、關東州の百一人七分最も少く、我臺灣は百三十二人三分を以て朝鮮、關東州の上に位す。又臺灣の公學校、朝鮮の官公私立普通學校、樺太の土人教育所及關東州の官立公學堂並公立普通學堂兒童の人口千に對する割合は、樺太の百二十五人七分最も多く、我臺灣は五十五人一分を以て之に亞き、朝鮮は僅かに二十二人を以て最下位に在り。

一 教育機關 (昭和元年度)

醫學專門學校	一	六〇	三〇三	五〇
學校數			生徒又は兒童數	教員一人に付生徒(兒童)

高等農林學校	1	3	36	156
高等商業學校	2	1	290	42
商業專門學校	1	1	29	58
高等學校	1	1	42	24
師範學校	3	152	100	173
中學	9	396	197	230
高等女學校	2	191	197	330
農林學校	2	33	144	141
工業學校	1	33	334	141
商業學校	1	6	644	115
小學	133	796	25,895	335
公學校	733	5,168	26,011	551
實業補習學校	24	94	920	230
私立各種學校	7	25	245	126
書房	136	208	5,507	265

學校(小、公學校は分教場を含む)は年度末現在、教員、生徒(兒童)は三月一日現在
なり。教員には兼務者を含む。

二 内地其の他との初等教育比較

小學校	校數	教員數	兒童數	一校平均兒童	教員一人に付兒童	人口千に付兒童
臺灣	133	796	25,895	194.7	3.5	133.3
朝鮮	455	1,823	55,427	123.8	3.6	153.3
樺太	15	75	3,003	200.0	4.7	163.7
關東州	5	703	33,122	44.6	3.9	107.7
北海道	162	8,777	48,820	259.8	4.7	147.9
内地府縣	3,873	196,008	8,769,525	367.3	4.7	157.7
臺灣	733	5,168	26,011	295.2	4.8	55.1
朝鮮	1,392	8,372	40,828	293.8	4.8	33.0
樺太	6	7	338	38.0	3.6	157.7
關東州	130	656	24,545	188.8	3.7	28.3

公學校の朝鮮は官公立普通學校、樺太は土人教育所、關東州(州内)は官立公學堂及公立普通學堂の事實なり。
人口千に付兒童算出の基數は、小學校に在りては内地人のみを、公學校に在りては各其の本土人のみを以て算出す。

臺灣の兒童は昭和二年三月一日現在なり。
 朝鮮は昭和元年度末(兒童は昭和二年三月一日)現在にして同府統計書に依る。
 樺太は昭和元年度末現在にして同廳統計書に依る。
 關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は昭和元年末現在にして同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は大正十三年度末(兒童は大正十四年三月一日)現在にして帝國統計
 年鑑に依る。

四四 衛生機關

臺灣には昭和元年末現在、官立十三、公立十六、私立七十三、計百二の醫院さ、一千十
 九名の醫師さ、四百八十六名の醫生さ、一千九十四名の産婆を有す。醫師、醫生一人に對
 する人口は全島平均二千七百六十一人にして、その割合の最も少きは新竹州の二千三百五
 十一人、最も多きは澎湖廳の五千八百八十一人なり。

總數	醫院			醫師及醫生			産婆	醫師醫生 一人に付 人口
	官立	公立	私立	總數	醫師	醫生		
臺北州	三	六	三	一五五	一〇九	四八六	一〇九四	二七六一
新竹州	一	一	七	三三	二五	八二	一九九	二五四五
臺中州	一	二	二	二五	九二	一七三	四六	二三五二
臺南州	二	四	二	三三	二〇	一〇三	一〇八	二八九六
高雄州	二	四	九	三六	二八	八八	四七五	二九九四
臺東廳	二	二	六	一八	一四	四三	三五	二九五五
花蓮港廳	一	一	一	六	六	一	三	二七五四
澎湖廳	一	一	九	三	三	一	六	二四〇五
總數	一三	一六	七三	一五五	一〇九	四八六	一〇九四	二七六一

醫生は明治三十四年府令第四十七號臺灣醫生免許規則に依り免許を得て其の管轄
 内に於て醫師を業と爲す者さす。

本表の外藥劑師九十名、齒科醫師百一名を有す。

四五 水道

臺灣に於ける既設水道(簡易水道を含む)の總數はバロン、恒春、馬太鞍、カムテン等の給水戸數及消費水量不明のものを除き、昭和元年度末に四十二箇所、年度末現在給水戸數は専用栓戸數二萬八千七百七十七戸、共用栓戸數二萬五千四百四十三戸にして其の消費水量は消費水量不明の八水道を除き計量供給千三百四十二萬七千八百八十一立方米、放任供給千四百二十六萬二千二百六十立方米なり。

年度末現在

年度中消費水量(立方米)

名稱	給水開始年月	專用栓戸數	共用栓戸數	總數	計量供給	放任供給
臺北州	明治三二年三月	四四六	九五六	八九二、二七三	三九、二六九	八五、九〇四
淡水	同 三五年五月	三六三	二六一九	二、六一三、六二〇	二、六三六、二〇〇	—
基隆	同 四二年七月	二、二二三	九、一八九	七、五三三、二五一	七、五三三、二五一	—
臺北	同 四三年七月	三	二〇六	?	—	?
金山	同 四四年五月	一九六	四八五	三三八、五四二	一六、七三三	三二、八二〇
士林	同 四四年六月	九四	三六七	一、三、八六四	一六、九六四	九六、九〇〇
北投	同 四四年三月	三〇	二三四	五五、九三七	—	五五、九三七
三芝	大正一〇年四月	—	六八	一六、九八〇	—	一六、九八〇
坪林	同 一四年一月	—	—	—	—	—
南方澳	同 一四年一月	三	二〇〇	二、八七四	三、〇七七	一八、七九七

新開園	北絲園	檳榔樹格	里攏	知本	呂家	太麻里	新港	卑南	臺東廳	岡山	旗山	屏東	高雄	高雄州	斗南	新化
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一四年九月	一四年九月	一四年七月	一三年四月	一二年二月	一二年二月	一二年八月	一二年八月	大正一一年一〇月	同	同	同	同	同	同	同	同
九	九	一	八	六	一	一	七	七	九	二〇二	六	七	二〇二	三	五	七
五四	九九	五三	一四七	二五九	二二三	一五〇	五二	一六	七四	三五	五九八	九五六	三,三二二,八三三	二四	六七	二一六
八,七六〇	一七,八八五	一一,六八〇	三七,九六〇	三六,一三五	三三,二二五	一七,五二〇	三四,六七五	二九,八三〇	五,二二五	?	九九七,八〇七	一〇,九九,五二一	一〇,九九,五二一	?	?	二九,八三〇
八,七六〇	一七,八八五	一一,六八〇	三七,九六〇	三六,一三五	三三,二二五	一七,五二〇	三四,六七五	二九,八三〇	五,二二五	?	七四五,二〇六	二,三二二,七七三	二,三二二,七七三	?	?	二九,八三〇

臺南	嘉義	斗六	臺南	內埔	田中	員林	潭子	二水	埔里	豐原	臺中	大甲	彰化	臺中	新竹	新竹
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
一一年四月	一三年三月	大正元年一二月	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
二,三三九	一,二五九	一六二		八〇	三八七		七	四八	三三〇	二,七二一	二,五	六〇五	六〇五	二,五	二,五	
二,六九八	二,二四六	七六	三〇〇	六三	五八	一四五	二八〇	四七	八五	四九四	二,五	二九二	二,九二	二,九四	二,五	二,五
三,二九二,二九一	二,五〇五,三七二	一九〇,〇〇九	?	一,八六一	四五〇,五七四	?	?	三三八,六五八	二七八,八四二	二,九五〇,五〇一	四四六,三〇〇	三五七,二六	三五七,二六	二,九四	二,九四	?
五,六〇,六七二	六,三六,三四	七二,〇〇八			二五,四二			一四,四五二	九,八六三	二,九,七二六	五一,四〇〇	一〇二,五六八	一〇二,五六八	二,九,七二六	二,九,七二六	
二,七三二,六三〇	一,八六九,一四八	一一九,〇〇一	?	一,八六一	四,五,一六三	?	?	三,四,二〇七	二,六八,九七九	二,七二〇,七八五	三,九四,九〇〇	二,五,五,五八	二,五,五,五八	二,七二〇,七八五	二,七二〇,七八五	?

都 歴	同 一五年 二月	三	七	二七、八七	一	二七、八七
都 鑾	同 一五年 七月	二〇	一八	五〇、〇五	一	五〇、〇五
花 蓮 港 廳						
玉 里	大正 五年 一二月	七〇	一〇四	?	一	?
花 蓮 港	同 一一年 一月	五〇	四七	五三、六五	一	三五、七四
						三九、七〇

本表の外バロン、恒春、馬太鞍、カムテン等の水道あるも月数及消費水量不明なり。

四六 ペストとマラリア

臺灣は一般に不健康地の如く解せらるゝも、衛生設備の完成と共に、近年其の面目を一新し、ペストの如き大正七年以來全く之れが發生を見ず。又マラリアの如きも其の死亡數は年に依りて増減ありさ雖、一般に減退の傾向を示し、明治三十九年に於て人口千に付死亡數三人二分一厘なりしものが、昭和元年には一人三分九厘に減退し、其の實數に於ても同年間に四割五分を減したり。

死亡實數	ペスト	マラリア	指 數	ペスト	マラリア	人口千に付死亡	ペスト	マラリア
	明治三十九年	二、五三四	一〇〇	一〇〇	〇・七七	三・三二		
	同 四十年	二、四四八	九七	一一	〇・七九	三・七七		
	同 四十一年	一、〇六四	四三	一一	〇・三四	三・七五		
	同 四十二年	八五四	三四	九	〇・二七	三・三六		
	同 四十三年	二五	一	六	〇・〇一	二・九二		
	同 四十四年	三六一	一四	七	〇・二一	二・四二		
	大正元年	一八七	七	五	〇・〇六	二・〇六		
	同 二年	一三三	五	三	〇・〇四	一・九二		
	同 三年	四九四	一九	八	〇・二四	二・五六		
	同 四年	六四	三	六	〇・〇三	三・八三		

大正元年	二年	三年	四年	五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年
八七三七一	八二、二八	七六、九五五	七二、七二五	六六、八四七	六三、三七七	五五、七七二	五二、〇六三	四八、〇二二	四四、九三三	四二、一〇八
七五、九九九	七二、三八一	六六、八四〇	六二、一五六	五七、八二九	五三、八二八	四八、一五八	四四、八九〇	四一、三七五	三八、六八〇	三六、二五七
一一、三七二	一〇、七四七	一〇、一五五	九、五五九	九、〇一八	八、四七九	七、六二四	七、一七三	六、六三七	六、二四二	五、八五一
一〇〇	九四	八八	八三	七七	七二	六四	六〇	五五	五一	四八
總數										
男	八八	八三	七七	七六	七〇	六五	五九	五五	四七	四二
女	一四	一一	一一	一一	一二	一〇	〇九	〇八	〇七	〇七

總數 男 女 指數

總數 男 女

特許年齡以上の
本島人百に付

臺灣總督府は阿片問題に就ては、嚴禁主義を避けて漸禁の方針を執り、阿片癮者之認むる者に限り其の吸食を特許し、漸次之を絶滅を期し、逐年豫期の目的の到達に近づきつゝあり。即ち之を最近十五年間に就て觀るに、阿片吸食特許者(本島人)の數は八萬七千三百七十一人より三萬一千四百三十四人に減少したり。

四七 阿片吸食特許者

昭和五年	六年	七年	八年	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年
一一、三四六	九、七二九	八、三九二	八、一〇六	七、七六〇	七、〇七〇	八、九一六	七、一六四	七、九三五	六、五〇八	五、七五八
二	三	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
一〇七	九二	七九	七七	七三	七〇	六四	六〇	五七	五三	五〇
〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇	〇
三、三三	二、七三	二、三二	二、二二	一、八八	二、三三	一、八四	二、〇一	一、六〇	一、六〇	一、六〇

同	十二年	三九四六三	三三九六五	五四九八	四五	二三	三九	〇六
同	十三年	三六六二七	三一四九一	五一三六	四三	二二	三六	〇六
同	十四年	三三七五五	二九〇〇一	四七五四	三元	一七	二八	〇五
昭和	元年	三四三四	二六九八三	四四五一	三六	一六	二六	〇五

本表は各年十二月末日現在にして本島人のみの事實なり。

四八 鐵道

臺灣の鐵道は、昭和元年度末には官設鐵道（阿里山及羅東森林鐵道を含む）の營業哩數六百十哩に達し、外に私設鐵道千三百五十哩を有す。私設鐵道は主として製糖會社の經營する所にして内、營業線は三百二十七哩なり。

今之を内地其他と比較するに、百方に里に付鐵道營業線の哩數は、關東州の二百八十六哩七分最も多く、我臺灣の七十五哩四分に亞き、樺太の六哩六分最も少し。更に人口萬に付哩數は樺太の七哩六分最も多く、朝鮮は一哩にして最も少く、臺灣は二哩三分を以て内地の上に在り。

營業線路延長（哩）

區域	總數	官設	私設	百方に里に付	
				人口萬	人口萬
臺灣	九三八	六二	三七	七五・四	二三
朝鮮	一八七三	一三四二	五三一	二三・二	一〇
關東州	一五五	一五五	—	六六	七六
樺太	六九一	—	六九一	二六・七	六三
關東州	一〇、八八四	七八七	三〇〇七	四四〇	一八

朝鮮、樺太、關東州は昭和元年度末現在にして同廳統計書に依る。
内地道府縣は大正十四年度末現在の開業線哩にして帝國統計年鑑に依る。

昭和元年度に於て通常郵便は引受五千二百萬、配達六千四百萬、電信は發信百三十萬、著信百四十萬、爲替は振出二千五百萬圓、拂渡千五百萬圓、貯金は預入一千六十萬圓、拂戻一千五十萬圓、貯金現在九百萬圓、振替貯金口座受入七千九百萬圓、拂出七千八百萬圓、現在七十萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬一千四百八、年度中加入者發信通話度數は五千二百萬なり。

今之を内地其他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最小數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣なり。又人口千に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは關東州、最も少きは樺太なり。

四九 郵便、電信、電話

臺灣に於ける郵便、電信、電話の現況を觀るに、昭和元年度に於て通常郵便は引受五千二百萬、配達六千四百萬、電信は發信百三十萬、著信百四十萬、爲替は振出二千五百萬圓、拂渡千五百萬圓、貯金は預入一千六十萬圓、拂戻一千五十萬圓、貯金現在九百萬圓、振替貯金口座受入七千九百萬圓、拂出七千八百萬圓、現在七十萬圓なり。又同年度末現在電話加入者數は一萬一千四百八、年度中加入者發信通話度數は五千二百萬なり。

今之を内地其他と比較するに、人口十に對する割合は通常郵便引受、電報發信、爲替振出及貯金預入を通して最多數を示すは樺太にして、其の最小數は通常郵便引受、電報發信及爲替振出の三は朝鮮、貯金預入は臺灣なり。又人口千に付電話加入者數の最も多きは樺太、最も少きは朝鮮にして、同加入者一に付通話度數の最も多きは關東州、最も少きは樺太なり。

一 郵便、電信、爲替、貯金及電話

通常郵便
 引人口十に對する受達受

五三〇八九四五六
 六四、九二、九四〇
 一三五、四

電 話		振替貯金		貯 金		爲 替		電 信	
加入者	人口千に對す	加入者	人口千に對す	加入者	人口千に對す	加入者	人口千に對す	加入者	人口千に對す
五三、二八八、九五三	二七	一一、四〇八	二〇六、〇	七九、〇五九、八三六圓	二五、七九八、八二圓	七六、八三三、二六三圓	一五、八〇一、九三八圓	一三、七七一、二一	一四、六七五、三五
				七六、九三三、〇〇圓	六一九	七〇、九三三、〇〇圓	一〇、五五六、七〇六圓		
				二〇六、〇		二五、六	九、一四五、一〇四圓		

二 内地其他との比較 (昭和元年度)

内地府縣	人口千に對する		電話	
	加入者數	付通話度數	加入者數	付通話度數
臺灣	二五、四	三三	二七	四、五八四
朝鮮	九四、四	二八	一、四	四、九三八
樺太	九、五二	六、五〇	一、六八	三、八二〇
關東州	三、八〇二	一、八五	一、三五	七、五二九
北海道	七〇、八二	二、二九	一、〇二	四、八二五
内地府縣	六、五四四	一、〇七	八七	三、九〇〇

通常郵便 電信 爲替 貯金
 便引受 發信 振出 預入
 加入者數 付通話度數

朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地)は同廳統計書に依る。
 北海道及内地府縣の爲替振出には外國爲替を含みます。
 北海道、内地府縣の爲替振出、貯金預入は大正十三年度、電話は大正十四年度の事實にして帝國統計年鑑に依る。

五〇 警察官署及職員

臺灣の地方警察機關數は昭和元年末現在に依れば、州警務部五、廳警務課三、警察署六、郡警察課四十五、支廳九、派出所及駐在所千五百四十四にして、同職員の數は警視十五人、警部及警部補四百九十人、巡查六千九百三人なり。

今之を内地其他と比較するに、一方里に對する巡查の數は、關東州の九人三分最も多く、臺灣は三人を以て之に亞き、巡查一人に付人口は北海道の千二百九十六人第一位を占め、内地府縣の千百十二人之に亞き、我臺灣は六百十四人を以て僅かに關東州の上に在り。

臺灣	朝鮮	樺太	關東州	北海道	内地府縣	警察署		派出所及駐在所		警視		警部及警部補		巡查		一方里に付人人口	
						警察署	分署	派出所及駐在所	警視	警部及警部補	巡查	巡查	巡查	巡查			
六〇	二五〇	七	二五	六四	二一九	—	—	一五四	一五	四九〇	六、九〇三	三〇	六二四	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	二、四六七	五	一、二〇九	一七、二八八	一三	一、二二	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	七三	三	二八	二九五	〇一	六九〇	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	三九八	〇	一四三	二、二七〇	九三	四八九	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	三七二	二四	一六五	一、九五〇	〇三	一、二九六	—	—	—	—
—	—	—	—	—	—	—	—	一七、三七七	二六	四、四四九	五、一七〇	二七	一、二二三	—	—	—	—

本表は昭和元年末現在なり。
本表巡查一人に付人口中臺灣の分は蕃地居住の蕃人を算入して算出す。

臺灣の警察署には郡役所警察課及支廳を含む。
 關東州の民政支署は警察分署として掲上す。
 朝鮮、樺太、關東州(州内、鐵道附屬地、領事館)は同廳統計書に依る。
 北海道、内地府縣は帝國統計年鑑に依る。

五一 最近十五年間の進歩

人		耕地		農畜		林産	
總人口	内地	本島	蕃外	總耕地	田	畑	畜産
大正元年	三,四三五,一七〇	一,三二,七九三	三,二二,三三二	七二,二八二甲	三,四六,三七四甲	三,六四,九〇八甲	二五,六六八,七三四圓
昭和元年	四,二四一,七五九	一九五,七六九	三,九二,七五二	八一,二二七	三,九三,九四三甲	四,二〇,六〇二甲	三七,八二五,二四三圓
大正元年を百として の指數	一一三	一五九	一一三	一〇七	一一四	一一五	一四七
				一九八			?

總	專	財	總	製	糖	工	水	礦
總	專	財	總	製	糖	工	水	礦
額	賣	政	額	高	業	產	產	產
額	賣	政	額	高	業	產	產	產
一七,〇九六,九二圓	四七,一八八,五七六圓	六〇,二九五,八五八圓	一二五,四二四,〇九五圓	二四九,三九九,七七九斤	七五,三三九甲	五二,〇二八,九一五圓	二,二五〇,六八七圓	四,四八二,五六一圓
三四,九〇九,四四七圓	九一,九四〇,五九八圓	一三,一七八,〇〇四圓	四三四,八三七,五二〇圓	六八五,三三四,〇一九斤	九九,六九〇甲	二,三六〇,五一九,九七圓	一七,二六六,六〇圓	一六,七六三,二五圓
二〇四	一九五	二一九	三四七	二七五	三三	四五四	七六五	三七四

(昭和二年)

阿片賣渡價額	食鹽賣渡價額	樟腦及樟腦油賣渡價額	煙草賣渡價額	酒賣渡價額	教育	鐵道	運輸	收入
六,〇二七,八三八圓	七四七,九三三圓	五,七九七,三〇七圓	四,五三三,八三四圓	—	小學校兒童	官設鐵道線路延長	運輸	收入
四,七二六,五六六圓	二,二七二,八七六圓	?	一四,〇〇四,五三六圓	一四,〇一五,四五九圓	八,九八〇	三〇三哩	乘客賃金	貨物賃金
七	二九一	?	三二〇	—	二五,八九五	六一哩	二,二五八,九四圓	二,五四八,〇三四圓

私設鐵道線路延長
郵便、電信及電話

八〇八哩

一三五〇哩

一六七

通常郵便引受通數

三〇,五七五,二四

五二,〇八九,四五八

一七〇

電報發信通數

九〇三,三六二

一,三七七,六一一

一五三

爲替振出金額

一四,三九七,〇四五圓

二五,七二九,八二圓

一七九

貯金預入金額

三,一九六,二四三圓

一〇,六四三,三八圓

三三三

電話

三,七五八

一一,四〇八

三〇四

加入者

一七,六三四,六二〇

五二,二八八,九五三

二九七

昭和三年六月廿八日印刷
昭和三年六月三十日發行

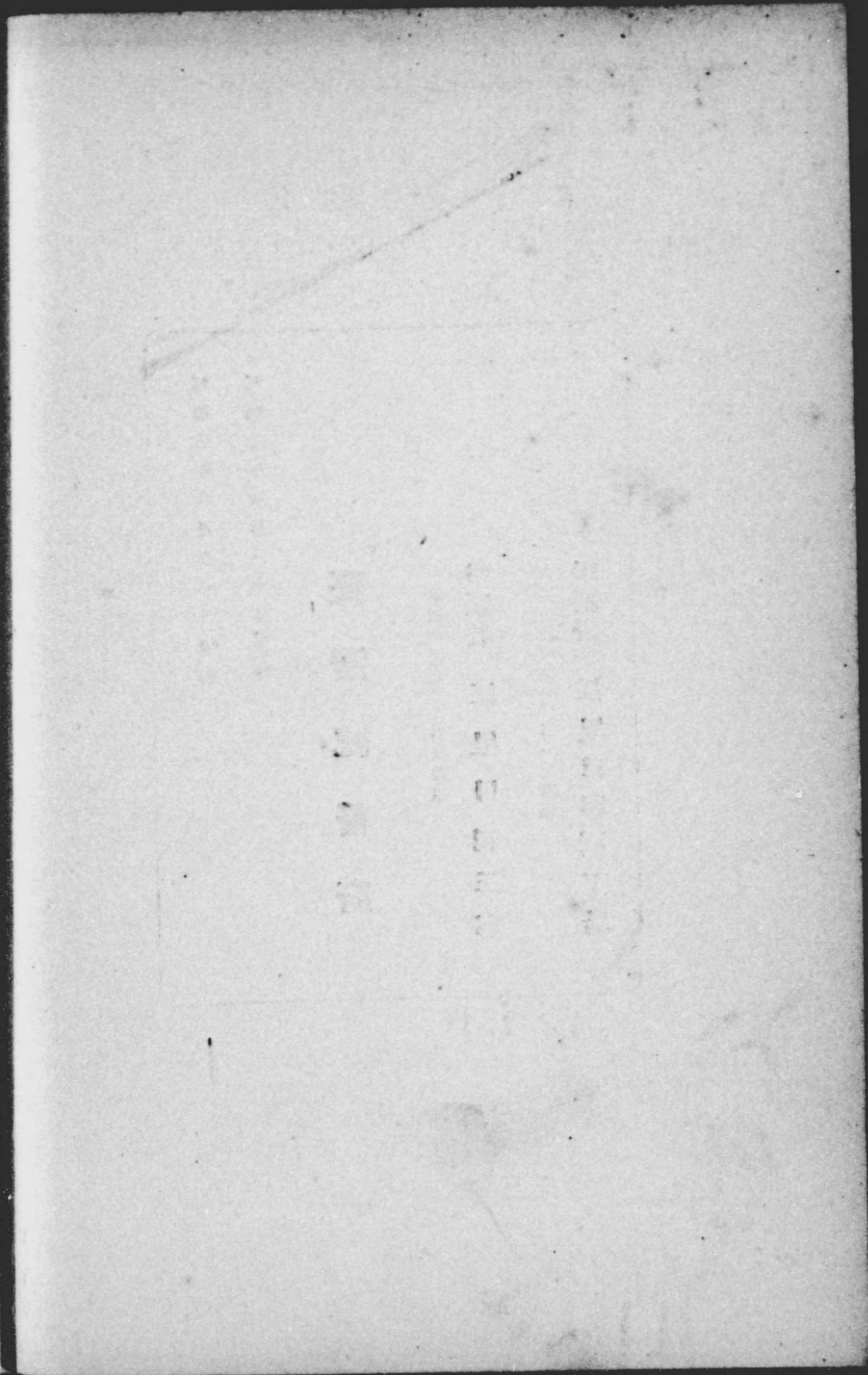
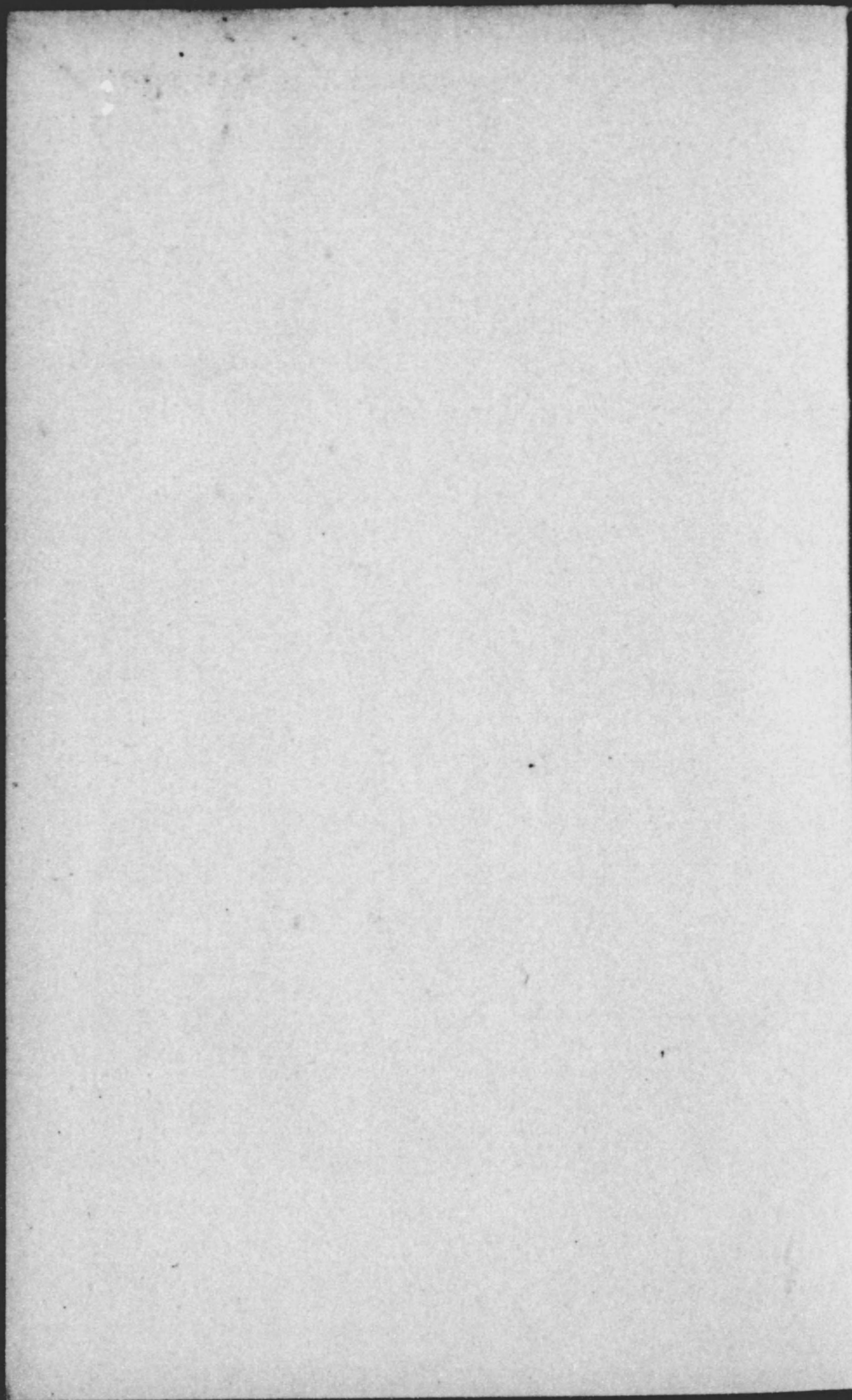
臺灣總督府

臺北市榮町二丁目四番地

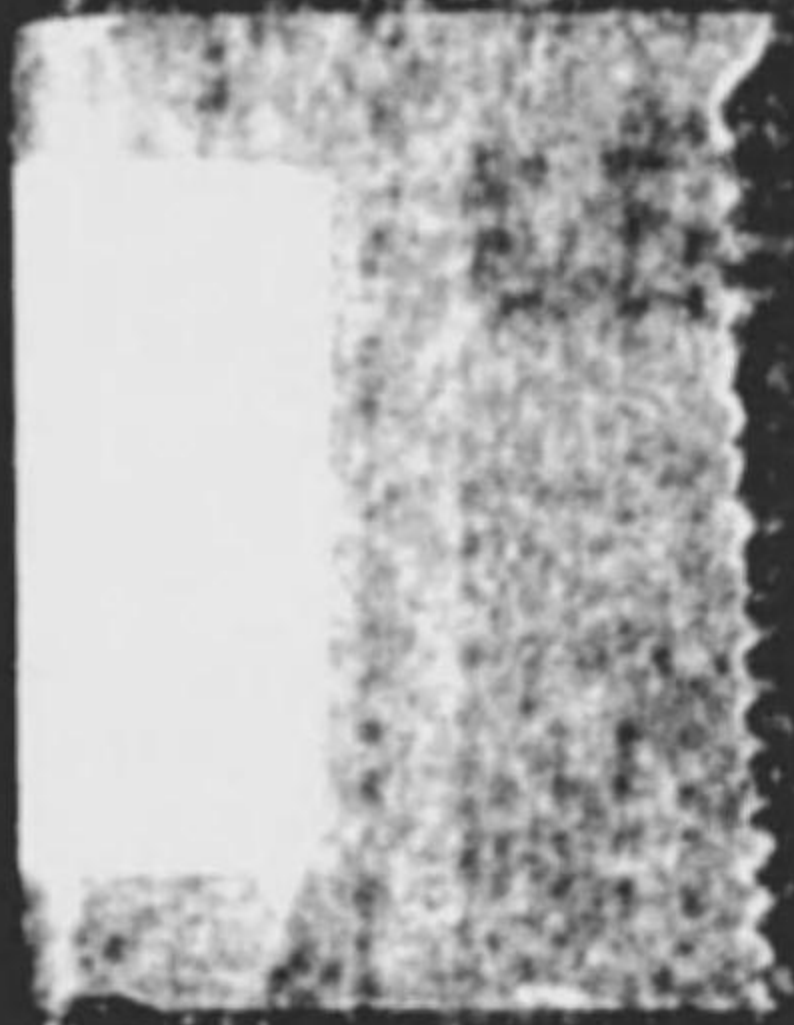
印刷者 江里口利三郎

臺北市榮町二丁目十二番地

印刷所 江里口印刷工場



510
357



11/10/10 10:00 AM



